加古川市埋蔵文化財調査集報

I

昭和５７年

加古川市教育委員会

加古川市埋蔵文化財調査集報

I

昭 和 57 年

目　　次

1．尾上町安田構居跡の調査 …… 1

2．志方町二子塚古墳の調査 …… 3

3．平荘町山角の貯蔵庫の調査 …… 25

例　　言

1. 私達の祖先は「加古川」の流れとともに、東播磨の国造りを行ってきた。とくに加古川市は肥沃な大地を有するが故に、祖先の足跡をしるす埋蔵文化財の豊庫である。それらの一つ一つには、市域の歴史的認識の基礎として興味ある事柄を伝えている。ここに加古川市教育委員会が実施した発掘調査の成果を速報し、祖先の国造りの歴史を理解する資料になればと考え本書を刊行した。

2, 本書は、加古川市教育委員が行った昭和56年度の発掘調査の内、調査が短期間であったのを中心に掲載した。

3. 本書の執筆は文化課岡本一士が行い、編集時に石原浩一氏の助力があった。また調査期間中に援助・助力を受けた方々については、それぞれの報告に記した。ともに記して厚く感謝の意を表する。

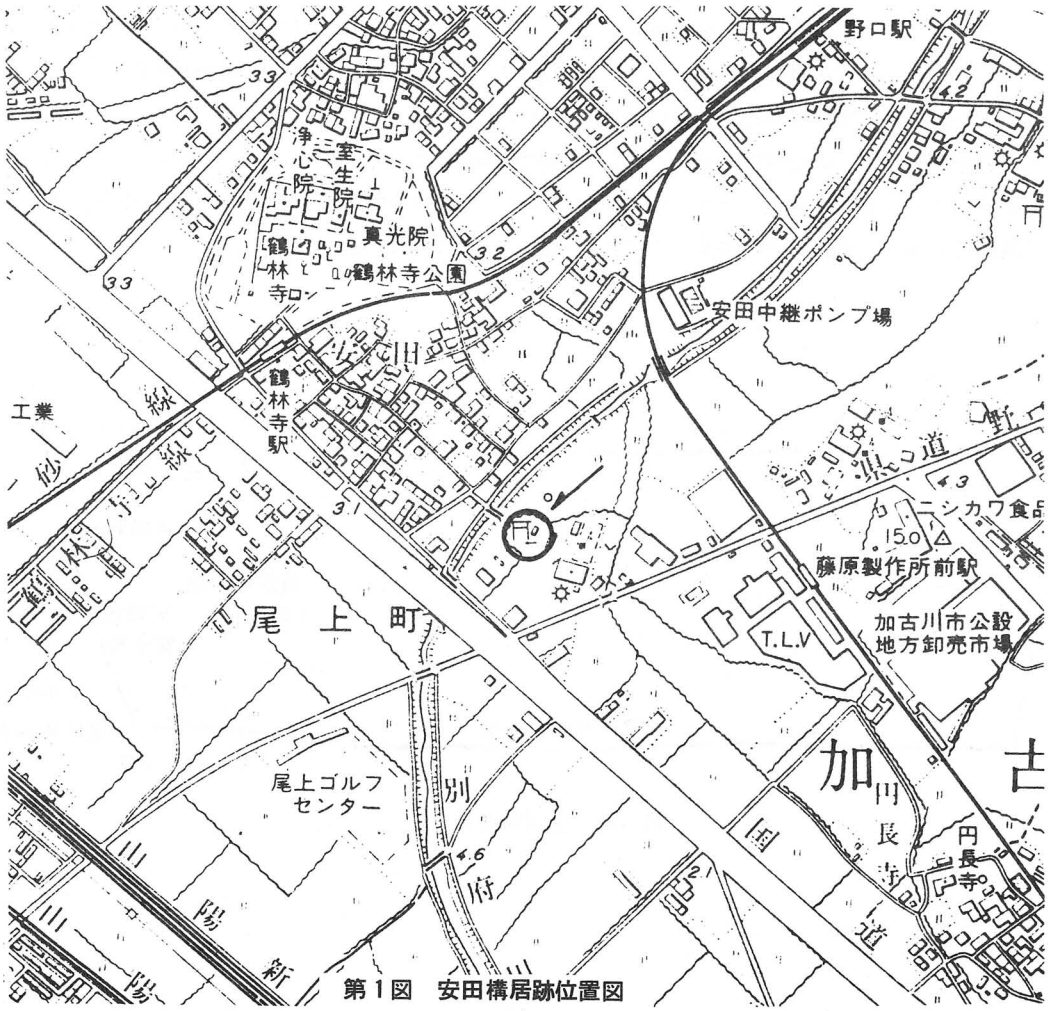
4. 各調査にあたっては、写真・実測図などの記録を作成した。広く利用されることをのぞむ。

1　尾上町安田構居跡の調査

Ⅰ　調査に至る経過

加古川市尾上町安田字宮前に所在する安田構居跡は、『播磨鑑』にも記載されている構居である。現在は公園と神社が建てられており、四方を小規模な川に囲まれている。この安田構居は、加古川平野部でも海岸線近くに設置された珍的なものであったのだろう。安田構居の西北方には稲屋構居があり、東南方には一色構居がある。

安田構居跡の西側には別府川が流れている。この別府川の改修工事に伴い周辺道跡が整備されることになった。安田構居跡の西南側でも工事が実施されており、一部堀跡と考えられる場所を埋めかかっている状況が知られた。この構居跡は、加古川市教育委員会の遺跡台帳に№249と記載されているもので、方形の場所とともに堀跡がよく残存し、旧状を今に伝えているものである。そのため、工事を中止し堀跡の確認をするための調査を実施した。



第1図　安田構居跡位置図

発掘調査は加古川市教育委員会が主体となり、昭和56年６月17日に実施した。この間調査にあたっては、兵庫県加古川土木事務所および大北正勝氏の援助・助力を受けた。記して厚く感謝の意を表したい。

それでは次に、発掘調査の状況について記すことにする。

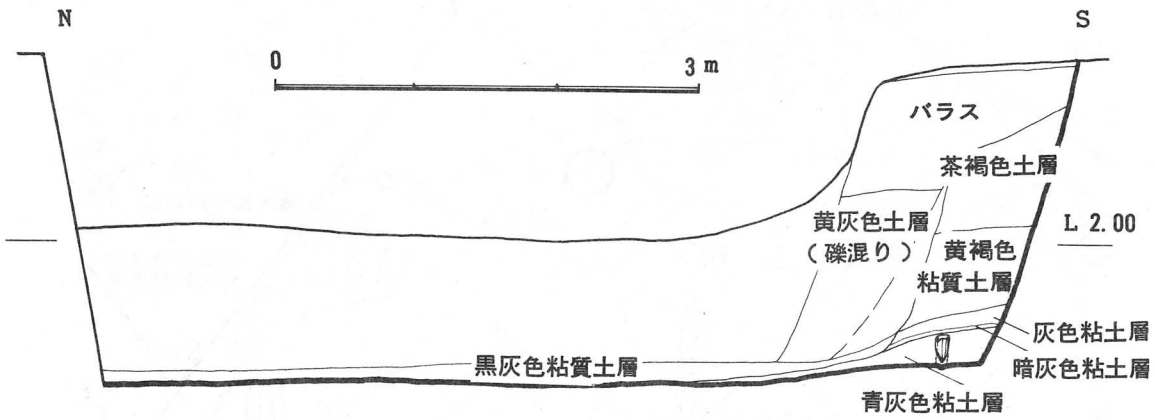
Ⅱ 調査の成果

安田構居跡の堀部分に直交してトレンチを設定した。ただしトレンチ設定場所は、工事のために土砂で埋められた所に限定した。

トレンチを設定した場所は、現在も川として使用されている。そのため、川＝堀内部はすべて堆積層であった。しかし、川の右岸は、土層観察によって２～３回の改修を受けている。その改修の都度堀幅は狭くされたのが判明した。現在の川底面は南に向ってやや昇り傾斜になり、岸として立上る過所に杭が打ち込まれている。この杭は、過去の改修時のものであろう。調査によってみられた立上り部分をもとに考えれば、本来の幅は約６ｍになり堀として充分機能するものである。そして、堀の護岸も石垣を築み上げたものではなく、土砂を叩き締めたものか、素堀りであろう。ただ、安田構居は以前にあった川を堀にしているので、素堀りの可能性が強い。

出土遺物は、安田構居跡と関連付けるものはなかった。

発掘調査は一日の短期間であったが、安田構居跡の堀は川を利用しているとはいえ、その幅６ｍをもつことが判明した。また、安田構居自体も小規模な防禦地点として旧状の方形区画を残し、戦乱期にあって前線の役割を果したであろうことが推察される。



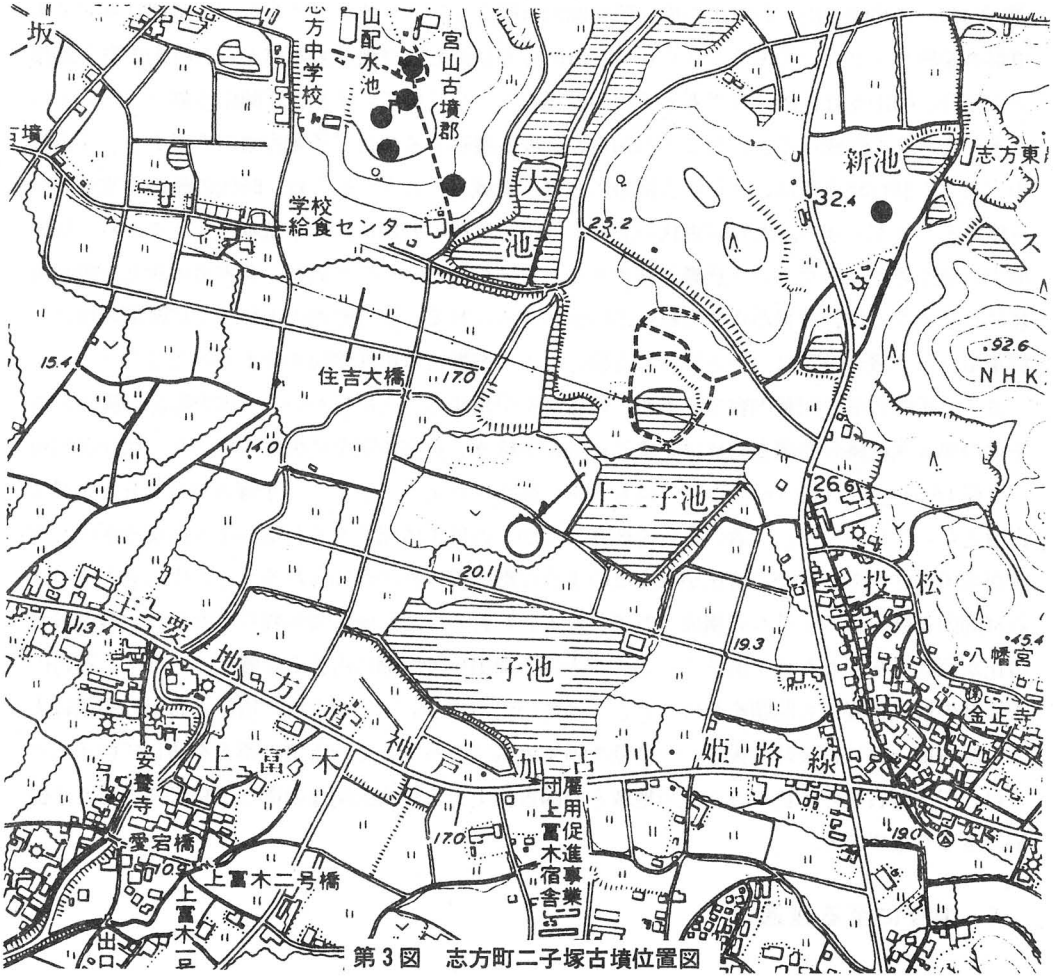
第２図　堀跡断面図

2　志方町二子塚古墳の調査

Ⅰ　は　じ　め　に

加古川市志方町字岡山に所在する二子塚古墳は、横穴式石室を有する円墳である。古墳は北方より派生する丘陵の先端にあり、古くから所在が知られていた。二子塚古墳は、その墳丘の規模といい立地する場所などから興味ある古墳である。

この古墳を最初に記録したのは栗山一夫氏である。氏は、『人類学雑誌』50・2 に「播磨加古川流域に築造されたる古墳及び遺物調査報告」（続篇１）を掲載し、その中で「志方・大塚古墳」として記述されている。古墳が紹介されている部分を引用してみると、「横山古墳の北方、高畑南方丘陵の山麓字岡山にあり、封土一部削平され奥壁破壊されている。羨道長さ４ｍ、幅 1.25ｍ、玄室長さ 5.50ｍ、幅境界近くで 1.50ｍ、奥壁で 1.43ｍ、両袖型、左右共に境界石によって突出、左４cm、右 21cm、庖丁型に近い。天井石玄室４枚、羨道３枚、境界に於ける落差 61cm、内部土砂



第３図　志方町二子塚古墳位置図

流入の為殆んど埋められんとし高さ不明、使用石材中等大、奥壁は小石材を積む。南面、」している。これからすると、まだ横穴式石室は残存しており石室内に入れたことが知られる。ただ、石室の破壊と共に墳丘も崩壊しつつあるようである。また入口附近の記述がないことから、羨道へは相当土砂が流入していたのであろう。この報告以後研究されることがなく戦後を迎えた。

昭和　年志方町教育委員会が、全町内の埋蔵文化財を把握するため分布調査を実施した。これ以前にも調査されたことがあったかも知れないが、調査班を編成し目的意識をもった方法による調査はこれが最初である。その結果は、新しく旧石器時代の遺跡や札馬古窯跡をはじめとする窯業生産遺跡などが知られ、志方町だけにとどまらず東播磨の古代史に大きな成果をもたらすことになった。それが、『古代の志方』と題する2冊の報告書である。二子塚古墳は報告書の『古代の志方 － 古墳時代』に、再び地域の古墳として記載されることになった。この成果は、現在の加古川市文化財台帳にも引き継がれている。

二子塚古墳は『古代の志方 － 古墳時代』では、「石打山群集墳を構成する第1号墳」という形で把握されている。この石打山群集墳は「西方の丘陵（標高52.8m）を石打山、東方の丘陵（標高49m）を高畑寺山、石打山の南丘陵を岡山（標高26m）と呼び、これら三丘陵に存在する古墳群を総称し」たものである。さらに「古墳の分布状況および地理的な点から石打山支群と高畑寺山支群、岡山支群とに分けて考えるのが妥当」だとしている。また、「岡山支群は、かっては3基にて一群を形成して」いたことが知られ、現在残存するのは二子塚古墳のみである。『古代の志方』の刊行時点では、さらに広範囲に古墳が消滅したことが知られ、時代の流れを文章間から感ずることができる。ただ『古代の志方』は、古墳群の分類に地形を基本としすぎたり、群集墳で古墳を考えるのだという意識が強すぎるきらいがある。そのために、各古墳の相互比較が複雑になりすぎ、報告内容からの考察に不明瞭さがみられる。志方町内の古墳とくに後期古墳は、群集墳という概念設定はいいとしても支群としての把握には再度検討を要するのではなかろうか。

さて二子塚古墳の記載内容であるが、報告文を引用することにしたい。「志方町誌の編さん時および第2次遺跡分布調査時には、すでに墳丘を除き、石室を完全に失なっていた。墳丘は円墳で直径18.5m、高さ約3m、かってはもう少し高かったようである。」二子塚古墳は墳丘のみ残る古墳となってしまった。二者の報告を紹介したが、古墳主体部である石室が年々損壊を受け、周囲が水田化されていく中で墳丘が独立墳のような形で残ったのが知られる。『古代の志方』によれば岡山支群として3基から構成されていたといわれる。二子塚古墳が残りえたのは、群中最も墳丘が巨大であったためであろう。このことは、岡山丘陵南端に占める位置だけでなく、石打山古墳群の形成過程にも問題を及ぼすことではないだろうか。二子塚古墳の墳丘と石室の規模は志方大塚古墳と共に古墳時代後期の一時期を画す墳墓であろう。この古墳の調査を通していえることは、二子塚古墳の築造こそが志方地域と我国古代史との政治的関連の密なる時代であったと提唱できることである。

Ⅱ　調査に至る経過

二子塚古墳の周辺は、近年の圃場整備が実施され旧観を一変させた。そのため、周辺の圃場整備を機会に、古墳が所在する耕地を水田化のための整備をしたいとの届が所有者よりなされた。加古川市教育委員会では検討の結果、残存する墳丘を中心とした調査を行なうことにした。すなわち、諸々の文献・報告書を照らしても墳丘のみ残ると記述されてあり、現地踏査からも記載事実を認めざるを得ない状況であった。調査は墳丘の築造過程究明を課題に、横穴式石室の石材の抜き取り跡を検出し主体部の規模を確認するのを目的とした。

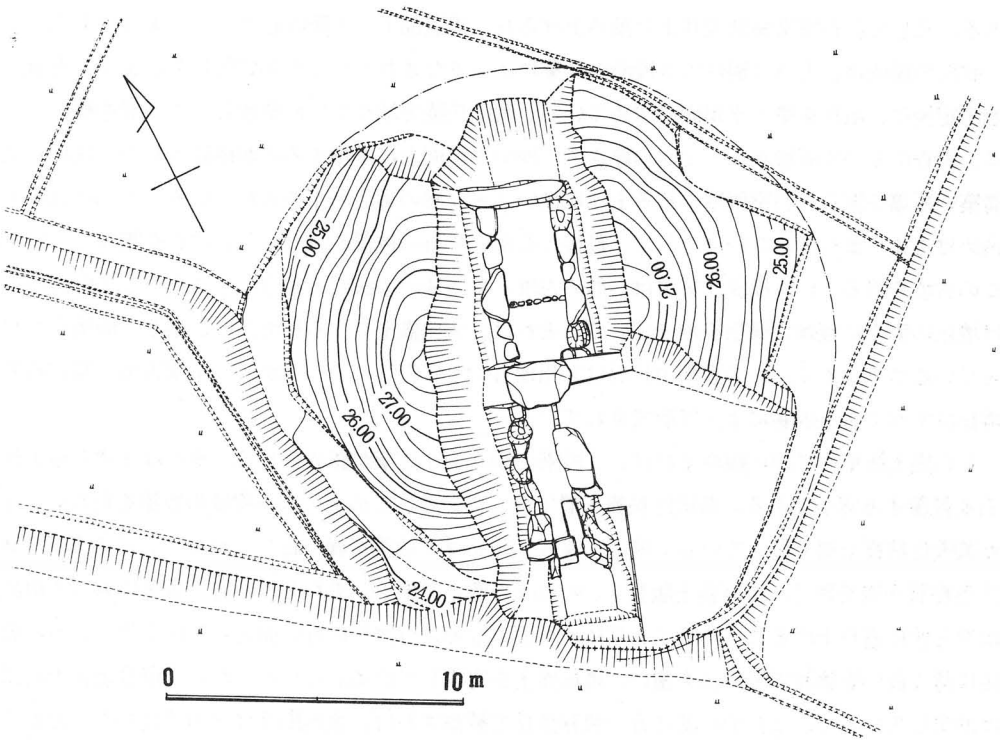
発掘調査は加古川市教育委員会が主体となり、昭和56年10月19日から昭和56年11月９日まで実施した。この間調査にあたっては、土地所有者上田佐市郎氏、掘削作業には志方建設の助力と協力があった。また、現地作業・遺物整理には平井豊子・山田光子・大北正勝・石原浩一・柴田博己の諸氏の助力があった。ともに記して厚く感謝の意を表したい。

それでは次に、調査の成果について記すことにしたい。

Ⅲ 調査の成果

1. 墳丘

墳丘は、過去の石室石材除去のため中心部が陥没している。そのため現状は、北側が切れたド



第４図　志方町二子塚古墳墳丘図

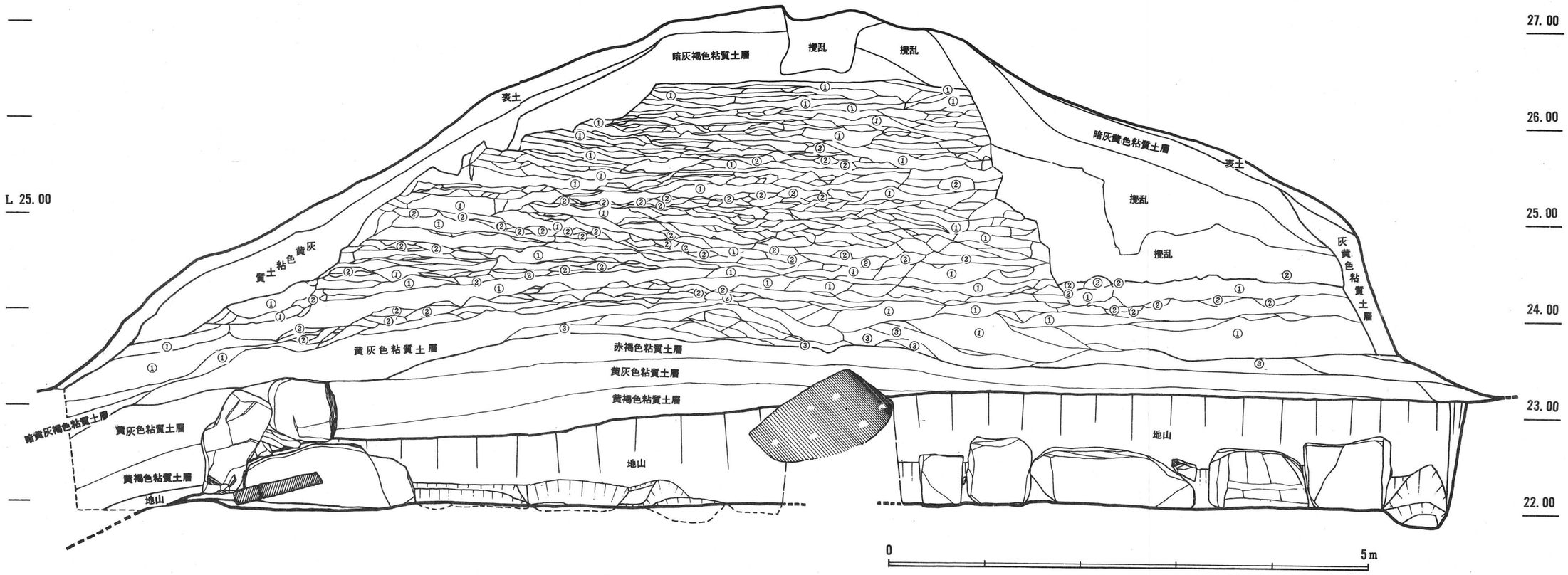
ーナツ状を呈している。古墳の北側は、さらに水田化の整地がなされている。この場所には岡山丘陵から古墳を独立させる半月状の溝或いは周濠が存在したと考えられるが、現状は平坦な水田面としてあるだけである。また古墳の東西と南側は共に墳丘裾部想定位置より一段下がるため、先の溝・濠があれば底部まで掘り下げられた可能性が事前に考えられた。一応それぞれの場所にトレンチを設定したかったのだが、調査範囲の限定のため北側についてのみ試みることができた。その北側は耕土下は地山面となっている。溝の痕跡すら認めることができず、相当削平されたことが推定できた。ただ調査の進行にともない東西と南側には溝が残存していることが推察された。

二子塚古墳の発掘調査には、(1)墳丘断面の観察から墳丘築造の手懸りを究明する。(2)石室の平面規模を確認することの2点に重点を置いた。とくに今回は1)の墳丘断面観察から成果が得られたのは幸いであった。加古川市内に所在する古墳時代後期の古墳では、その墳丘の断面図が知られているのはほとんどない。そのなかで二子塚古墳の墳丘観察は、全く新しい資料を提供してくれたといえるのである。それは、築造過程が把握できたことである。

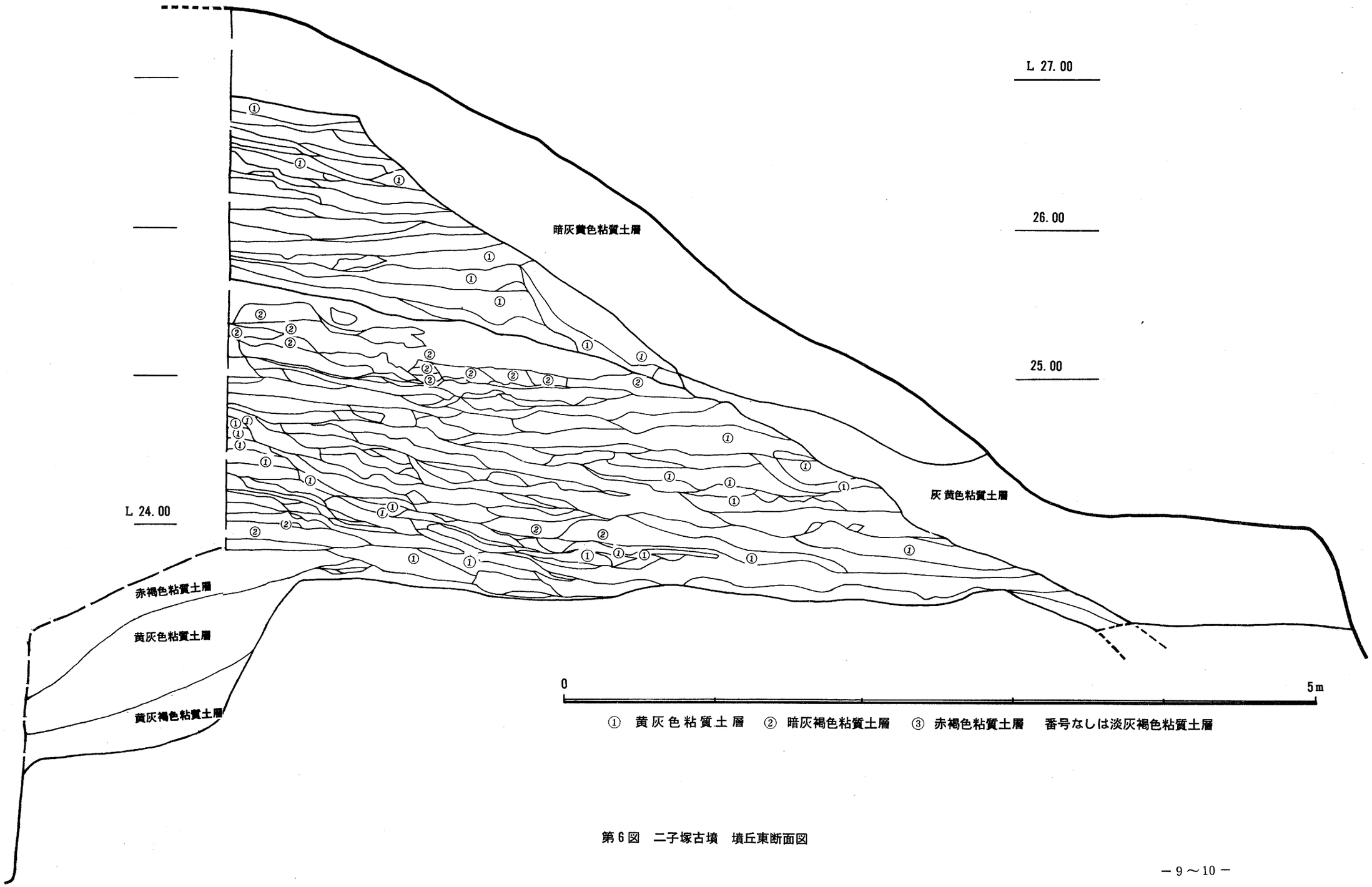
墳丘は、現在二つの山に分かれ「二子山」になっている。調査着手前に墳丘の断面を観察すると、何層にも築成された地層がみられた。墳丘西側の山に南北断面をとり、東側に東西断面をとった。墳丘崩壊面を垂直に削ると、複雑な版築状況の地層が露出したのである。墳丘は約4mあり、すべて盛土であった。墳丘中心部の断面ではないが、墳頂部は平坦な面を呈していたようである。そして、石室玄室部天井より築み上げられ、羨道部上へと築成していったようである。

墳丘の構成は、大きく別けて3段階の作業によってなされているのが判明した。まず、古墳占地決定後に、墳丘を築く平坦面を求めている。岡山丘陵先端を平坦に整地し、この面を焼いている。調査において灰層が1～2cmの厚さで、地山平坦面上に堆積するのが確認された。次に石室構築の墓壙を堀り、石室側壁の積み上げに従い2～3層の裏込め土を入れている。これには叩き占めはあまり施していない。そして、最後に石室天井石の被覆を行なって、墳丘を築成している。この古墳を造るという構成作業には、他の古墳とも同様の手法であろう。ところが二子塚古墳には墳丘の築成に複雑な様相をみせている。それは、墳丘盛土をするにあたり、細かく版築を行なっていることである。この版築の状況は九州地方でも報告されているが、二子塚古墳の現在残る墳丘はすべて盛土版築によって形成されている。

この盛土版築を詳細に観察すれば、3段階の築み上げ作業が認められる。それはまず石室天井石を被覆する盛土である。黄灰色粘質土層で覆っている。この上に40cm程度の版築を行ない、また黄灰色粘質土層で覆っている。続いて厚さ1.20mまで版築を繰り返して行ない、その上部を黄灰色粘質土層を敷く。再び盛土版築を、約80cmの厚さで施す。それぞれの盛土版築において頂部は半月状に盛り上げることをせず、常に平坦面となるよう水平に近い面として仕上げている。最後に薄く長い版築層で墳頂部を覆い、墳丘盛土を完成している。このことから、現在墳丘中心部は消失しているが、より中心部に近い残存墳丘で観察すれば、墳丘頂部は平坦ではなかったかと推定される。墳丘地層からいえることは、墳丘は半月状に盛り上げていくのではなく、常に平坦面を形成しながら墳丘施工されているのである。古墳時代後期の古墳頂部はどうであったか、こ



第5図　二子塚古墳　墳丘南北断面図



第6図 二子塚古墳 墳丘東断面図

の問題に一つの資料を提供するのが二子塚古墳の地層図である。古墳頂部は土砂の流出のため、本来の形状が残りにくい場所である。そのため、地層の観察で少しでも半月状になっていれば、意識として円墳の頂部は丸いのだと決定しがちである。だが、本来は墳頂は平坦であったといえないだろうか。これは方墳の問題とも関連することで、とくに古墳時代後期の大型円墳の規制を考えるにも興味ある事柄である。

墳丘の盛り上げ方向は二子塚古墳の場合、玄室部から羨道部に向けて後方から前方へ盛土版築が施されている。このことは、石室前面である南側で墳丘の体裁を整えようとする意識が働いているのではないだろうか。丘陵先端や斜面の前傾地に墳丘を築く場合、石室奥壁は斜面高所に羨道は斜面下方の低所に位置する。そのため、後方の玄室部地山高に並行に盛土すれば、結果として羨道上部は厚く盛土を行なわなければならない。二子塚古墳は前傾地に築かれたためと、墳頂部を平坦面で保持することから、羨道部に厚く版築を行ない墳丘を形成したと考えられる。これは傾斜地で墳丘を築こうとするときの一つの技法ではなかったろうか。これから考えると墳丘の中心と石室玄室部の中心とは一致せず、二子塚古墳の場合は墳丘中心は前方にくるが後方にある古墳も存在する。これは墳丘形式の比重を前方か後方に置くかの技法の問題であり、一定の規則に基づくものではないのである。横穴式石室をもつ古墳は企画化されたものであることがよくいわれる。だが、二子塚古墳を通してみる限り、墳丘は高さのみが企画されたということができる。しかし、横穴式石室の平面企画と全く無関係ではなく、平面企画の規模に規制された墳丘高であった。

墳丘盛土の現在高は約４ｍであるが、墳丘の中心部を推測すれば約５ｍになると思われる。石室床面からでは現在約６ｍであるが、築造時では約７ｍあったと推定できる。このことから二子塚古墳は、丘陵先端に独立する大型墳であったことが判明する。これは志方町地域にあって志方大塚古墳とともに興味ある歴史的位置を占めるのではなかろうか。

2. 石室

「二子塚古墳の石室は消滅した、現在残るのは墳丘のみである」。これが今迄に記された二子塚古墳の結論であった。これを前提に今回発掘調査を行ない、墳丘の築成過程を究明することを第一の課題に作業を実施していた。ところが地山面を掘り下げた結果、墓壙と石室側壁基底部が遺存しているのが判明した。しかし、横穴式石室石材は相当搬出され、内部は撹乱を受けていた。現状は羨道入口附近と玄室側壁の基底部が残り、他は抜き取り跡が認められただけであった。天井石も一石しかなく落下した状態であった。石室の規模は辛じて抜き取り跡などから明確になった。その計測された規模からすると、二子塚古墳は墳丘と石室から加古川市内でも規模の大きい後期古墳であったことが一層裏付けられる。

それでは、石室について具体的に記していくことにする。

横穴式石室の平面形は両袖式で、南東方向に開口している。石室の主軸はＳ15度Ｅである。玄室の平面は長方形を呈し、やや胴張りの状態を側壁は示す。玄室の長さは主軸長で5.10m、左側壁は4.90ｍ、右側壁は5.00ｍあり、左側壁が少し長くなっている。玄室幅は、奥壁が抜き取られ

ているため推測であるが1.76ｍである。玄室中央部の幅は1.90ｍで玄室入口では1.73ｍあり、先にも記したがやや胴張りの状態である。

玄室奥壁は抜き取られ現在は無い。しかし、発掘調査から認められた抜き取り跡をみれば、奥壁は一枚石を使用したと考えられる。それも相当大きかったと思われる。奥壁抜き取り跡は幅が70.2cm・長さ3.38cmあり、その両端は狭く尖形を呈している。抜き取り跡の中央には、奥壁の安定のものであるのか根石が残っていた。この痕跡からは奥壁の上部の推測はできず、一板石のみか二石以上を積み重ねたものか不明である。全体の規模から考えて、一枚石の上部に割石を積むものであったのだろう。

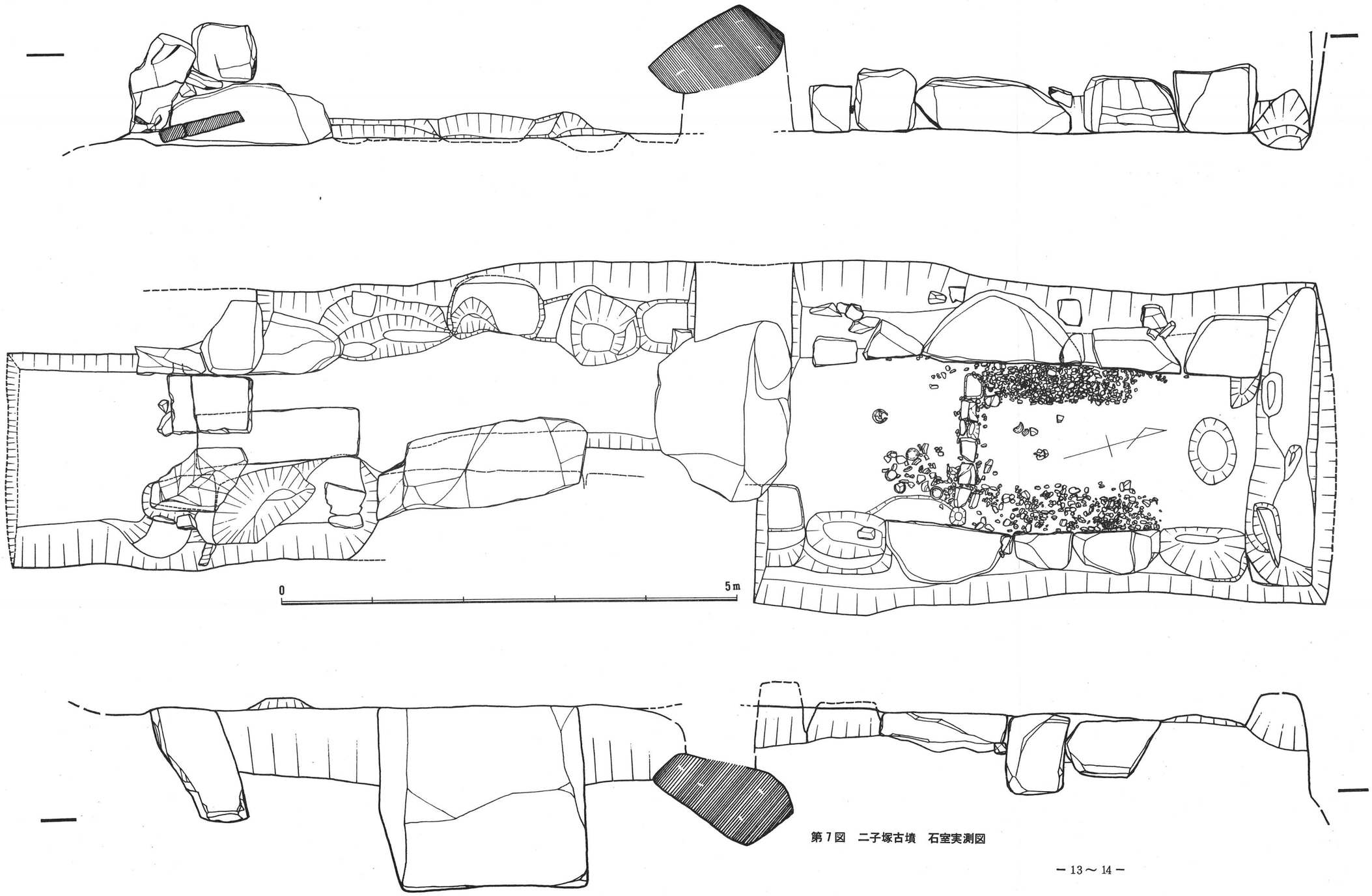
玄室側壁は大半が抜き取られ腰石が残っている。東側壁の一部は腰石も抜き取られ、その抜き取り跡が検出された。このように玄室側壁については、側壁腰石の状況しか記すことができない。それでは、東西の腰石はどのようなものであったのだろうか。まず東腰石は5個の石を底部に用いている。いずれも自然石を使用しており、割石は一石もなかった。腰石上部の積石については不明である。

玄室入口は両袖式になり、西側に対し東側の方が突出している。ただ、東側の袖石は抜き取られている。二子塚古墳は両袖式石室とはいうものの、極端に言えば片袖式石室でも通用する形状を示している。それだけ西側の出がわずかである。計測をしてみると、東側の突出は28cm、西側は7cmであった。

羨道部側壁は東側に一板石が残るが、羨道入口を除きほとんどが抜き取られている。東側壁の一枚石は高さ1.43ｍあり、この上部に羨道の天井石が載っていたと考えられる。その石の現状は内側に傾斜してある。この石を除き羨道側壁材は抜き取られ、辛じて羨道入口が残るにすぎない。

羨道入口には、凝灰岩質の板石が2個置いていた。一枚は、長さ179cm・幅59cm・厚さ15.0cmある。表面には鑿による加工痕が残っていた。一方の板石は半分に砕石されており、長さ92cm・幅66cm・厚さ15.0cmであった。この半砕された断片はどこにもなく、石室石材が抜き取られた時点で割られたのか、それとも以前であったのか不明である。この2枚の板石を立てると、羨道入口の扉石としては最適である。つまり二子塚古墳にあっては、羨道を閉ざすのに割石を積み上げた閉塞石を用いず、扉石により閉塞を行なっていたのである。これは加古川市内所在の古墳時代後期の古墳では最初の発見であり、兵庫県下でも極めて興味ある資料である。扉石をもって羨道閉塞することは、後の追葬を考えたものなのか今後考えていかなければならない問題である。この扉石が羨道側壁に接する部分には、東側に高さ124cm・幅71cm・西側に高さ114cm・幅41cmの側柱になると思われる石がある。また、羨道入口附近には割石の散乱もなく、横穴式石室の扉石は常に見える状態であったことが推察される。羨道の床面は撹乱を受け、築造時の状態を知るものではなかった。

この羨道入口より南へは、地山面が若干窪められているのがみられた。地山羨道が周濠に至るまでに存在すると思われる。このことは古墳の立地する南側には、まだ周濠が残っていることを想定させる。古墳の周囲は削平されてはいるけれど、南側水田下には前庭・周濠があると考えら



第７図　二子塚古墳　石室実測図

れる。今回の発掘調査では対象外であるが、今後機会があれば調査されなければならない場所である。

玄室の床面は厚さ約5cmほど土を置き、約5～10cmの礫を敷石に上に並べている。この敷石面上に遺物があるが、すべて撹乱を受けた後のものばかりで原位置を離れていると思われる。床面からは、須恵器・紡錘車・鉄鏃などが出土した。そして、奥壁より3.09cmの位置に閾石が7個並べられている。敷石面を精査したが、鉄釘は出土しなかった。敷石は玄室入口まで認めることができたが、羨道部は撹乱がひどく確認できなかった。

3. 石室墓壙

石室の設置のため地山面より1.87m掘り下げ墓壙をつくっている。その長さは13.90m・幅4.76mであった。深さは奥壁部分で2.13m・羨道入口で0.97mある。墓壙の壁面はやや上方に開いている。この墓壙の底面を掘り込み腰石を置いている。腰石と墓壙壁はほとんど接するようであり、その間隙に裏込め石を入れている。玄室奥壁も墓壙壁と接していたようであり、裏込め石は認められなかったが根石が残っていた。墓壙底面は、羨道に向かって少し傾斜している。

Ⅳ 遺　　物

玄室は撹乱されているため、副葬された時の状態を把握できるものはなかった。しかし、撹乱土中と玄室床面からは、金環・馬具・玉片・須恵器などが出土した。出土遺物からは、二時期にわたる埋葬が考えられる。それでは各遺物について記していくことにしたい。

1. 須恵器

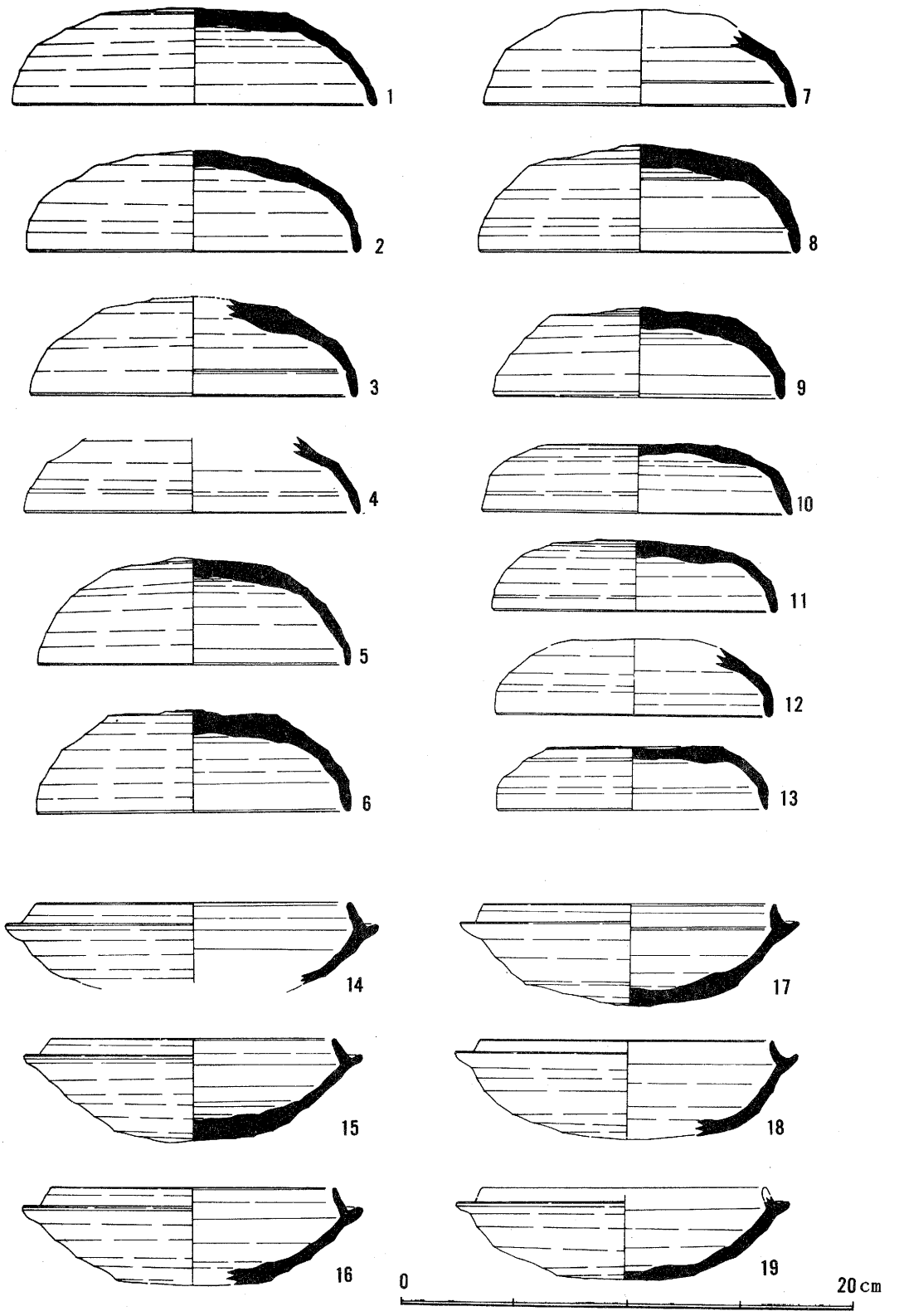
杯蓋　口径・器高・形態などからⅡ類に大別される。

杯蓋Ⅰ類

(1)は、口径16.0cm・器高14.3cmである。天井部から口縁部は丸味を帯び、口縁端部を丸く仕上げている。天井部外面は回転ヘラ削り調整を行ない、他はナデ調整である。内面もナデ調整が施されている。(2)は(1)よりも形状は丸味を帯びている。口径は14.8cm・器高4.5cmである。天井部外面を回転ナデ調整する他は、内外面ともにナデ調整である。(3)は天井部を欠損する破片である。口径は14.6cm・器高は推定4.3cmある。先のものと調整は同じであるが、口縁部内面には、一条の沈線を付ける。(4)は、口径14.6cmであるが、天井部欠損のため器高は不明である。(5)は、口径13.8cm・器高は4.6cmある。天井部内面を棒状のもので調整した痕跡がある。この他は(1)と同様の調整を施す。(6)も調整は同じで、口径13.8cm・器高4.5cmである。(7)は天井部を欠損する破片で、口径は13.8cmである。(8)は、口径14.2cm・器高4.8cmである。(9)は、口径12.8cm・器高14.0cmでナデ調整も荒い。Ⅰ類では最も小形である。

杯蓋Ⅱ類

この杯蓋は、Ⅰ類と比較して小形化しており、器高も著しく低い。胎土には砂粒を含み、焼成もやや軟質である。(10)は、口径13.6cm・器高3.0cm、(11)は、口径12.6cm・器高3.1cm、(12)は、口径12.0cm・器高2.8cm、(13)は天井部を欠損しており、口径12.2cmと計測ができるだけである。



第8図　二子塚古墳出土須恵器実測図

杯身　杯蓋の分類と共通してⅡ類に大別できる。

(14)は、口径13.8cm・器高4.3cmで大形である。受部径は16.6cmで立ち上りは1.2cmある。受部は比較的厚く、立ち上りは内傾している。端部は丸くなる。底部は欠損している。(15)は、口径12.4cm・受部径15.0cm・器高4.6cm・立ち上り1.0cmである。立ち上りは短く内傾し端部は丸くなる。底部は回転ヘラ切り未調整である。受部は薄く、上外方にのびる。内面はナデ調整を施している。(16)は、口径12.4cm・受部径15.0cm・器高4.3cm・立ち上り1.2cmである。形状観察は(15)と同じであるが、全体の整形は荒い感じがする。(17)は、口径12.9cm・受部径15.0cm・器高4.5cm・立ち上り1.0cmである。底部は丸味を帯び、立ち上りは低く厚くなっている。(18)は、口径12.9cm・受部径15.2cm・器高4.3cm・立ち上り1.0cmである。(17)と同様に底部は丸くなり、立ち上りも低く内彎傾向にある。Ⅰ類の最後に位置づけるべき形態である。

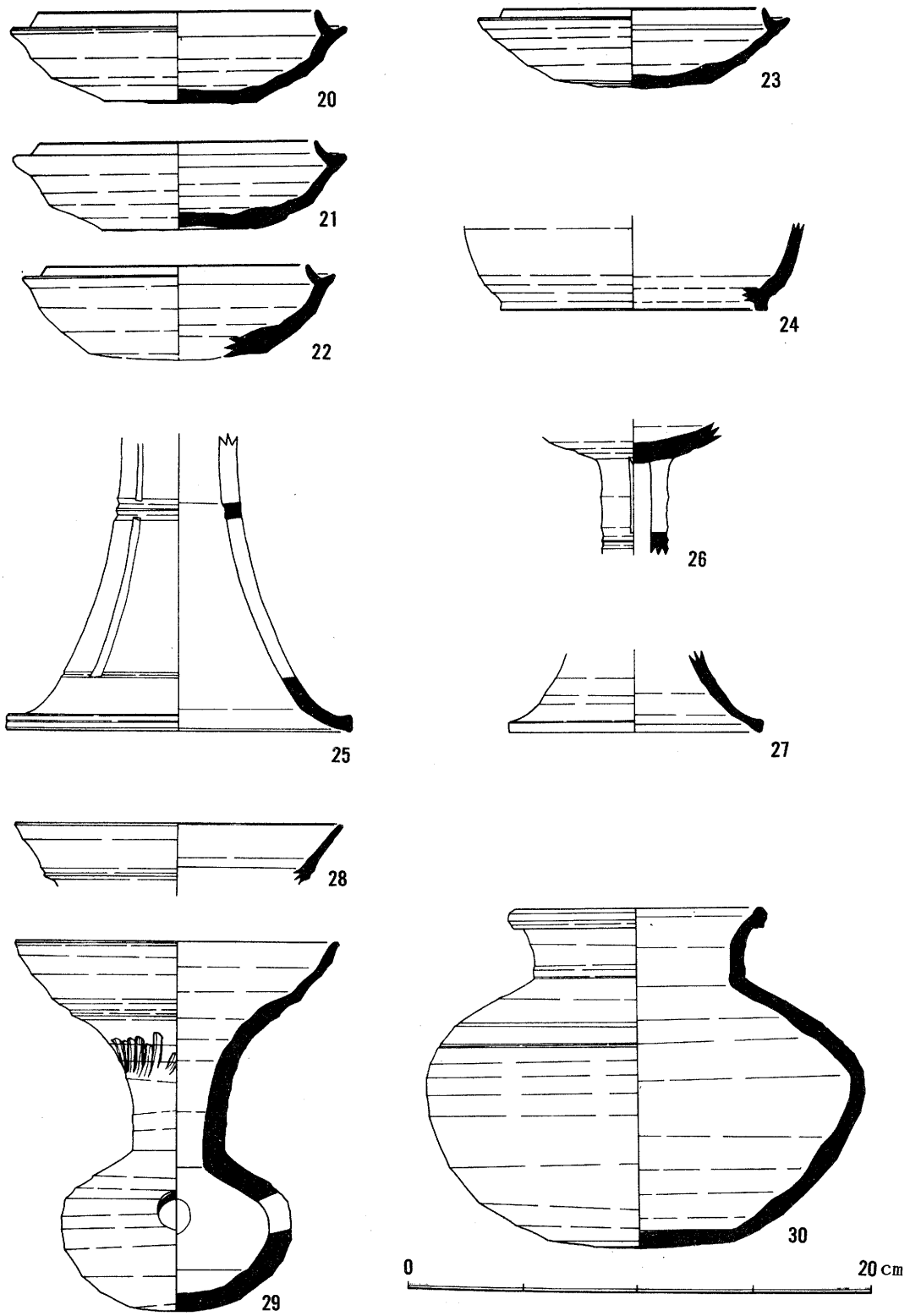
杯身Ⅱ類

これは全体に扁平感があり器高が低く、立ち上りも低くⅠ類に比較し一層内傾内彎する。(19)は、口径12.5cm・受部径14.8cm・器高4.1cm・立ち上りは欠損するが0.8cm程度であろう。底部は回転ヘラ切り調整で丸味を帯び、受部も上外方にのびるが厚くなっている。内面はナデ調整を施す。(20)も(19)と手法は同一で、口径12.5cm・受部径14.8cm・器高4.0cm・立ち上りは欠損しているが0.8cmであろう。(21)は、口径12.2cm・受部径14.6cm・器高3.9cm・立ち上りは1.0cmある。(22)は、口径11.9cm・受部径14.4cm・器高3.8cm・立ち上りはより内傾内彎し0.8cmである。(23)は、口径11.2cm・受部径13.6cm・器高4.1cm・立ち上り0.7cmである。器形の半分を残すのみである。(24)は、口径11.2cm・受部径13.4cm・器高3.5cm・立ち上り0.7cmである。砂粒を胎土に含み、立ち上りも最も低いものである。

杯身(25)は破片で一点の出土である。これは二子塚古墳の継続時期の最終と考えられるもので、羨道部より出土した。一応追葬に伴なうものと考えておきたい。口縁部は残っておらず底部破片のみである。底部径は復元すると11.5cmあり、現在得られる器高は3.6cmでしかない。

高杯　三点の出土があるが、いずれも破片で完形品はない。そして、長脚と短脚とがある。(26)は長脚二段高杯で脚部$\frac{1}{4}$が出土した。図化できる器高は12.8cmで、脚裾径15.0cmである。脚部中央には二本の沈線が入り、上下方とも長方形のスカシ窓がある。また、下方スカシ窓下部にも沈線を付ける。裾部は緩やかに外反し、その端部を曲げ段をつくる。(27)は、短脚二段高杯と考えられる。図化できる現在高は5.6cmである。脚部には二本の沈線を入れ、上方に長方形のスカシ窓を切り込む。(28)は脚裾部の破片であるが、短脚二段高杯と思われる。裾部径は10.9cmあり、裾端部には段は付けない。

瓦泉二点出土しており、一点は完形品である。(29)は破片であるが、口径14.1cmと復元できる。これは、頸部で段をつけ外反し、口縁端を丸くつくる。(30)は、口径14.0cm・器高16.0cm・基部径3.95cm・体部径9.9cmである。体部球形で最大径は中位にある。その部分に円孔を、上外方より下内方に穿孔する。基部は細く沈線はつけず、口頸部に段をつくり口縁端部へと外反する。口頸部下方にヘラナデ調整痕が残る。口縁端部は丸くつくられている。全体の調整はやや荒い。



第9図　二子塚古墳出土須恵器実測図

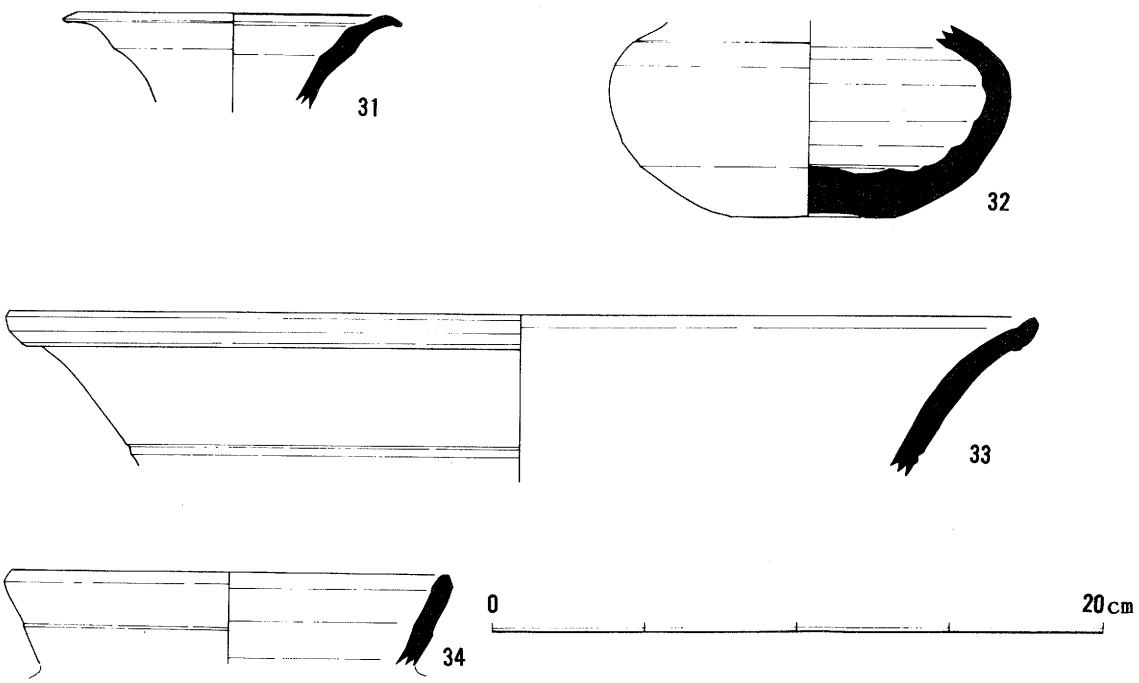
壺　(31)(32)(33)がある。(31)は短頸の壺で、口径10.7cm・器高14.7cm・胴部最大径18.8cmである。口縁部は外反させ、その端部を外方へ曲げ肥厚している。胴部肩に沈線を二条引き、胴部最大径部分で少し張りをもつ。胴部から底部にかけて回転ヘラナデ調整を施す。胎土は良質で焼成も良好である。(32)は長頸壺と推定されるもので、口縁部のみを残す。口径は11.0cmで、外反しながら端部を下方に向けている。(33)は口縁頸部を欠損するが短頸壺であろう。現器高6.4cm・胴部最大径13.1cmである。胴部肩に沈線を入れ、底部を上方に少し窪ませる。底部に自然釉がかかり須恵器片が付着している。

甕　破片で一点出土した。(34)の口径を復元すれば34cmあり、大形の甕である。口縁部は外反し、その端部を曲げ厚くする。そして、頸部下方に沈線を引く。

土師器壺　(35)は口縁部のみの破片であるが、口径を推定すれば14.2cmとなる。短頸の壺と考えられる。頸部途中にナデ調整による段ができている。口縁端部は丸くつくり、口縁頸部をやや外反させる。

2.　金環

玄室内より二点出土した。どちらも径が異なるのと断面形が違うけれど一人の被葬者のものと思われる。二点とも残存状態は非常に良く、小形の優品である。これは棒銅を曲げ金張りを施した一般的なものではなく、純金線を環状にしたものである。(36)は、径1.9cm・断面形0.1cmあり、(37)は、径1.6cm・断面形0.12cmでやや小さい金環である。この純金線を曲げただけの金環の出土は、加古川市内では初めてである。玄室内撹乱を受けたため、原位置は不明である。



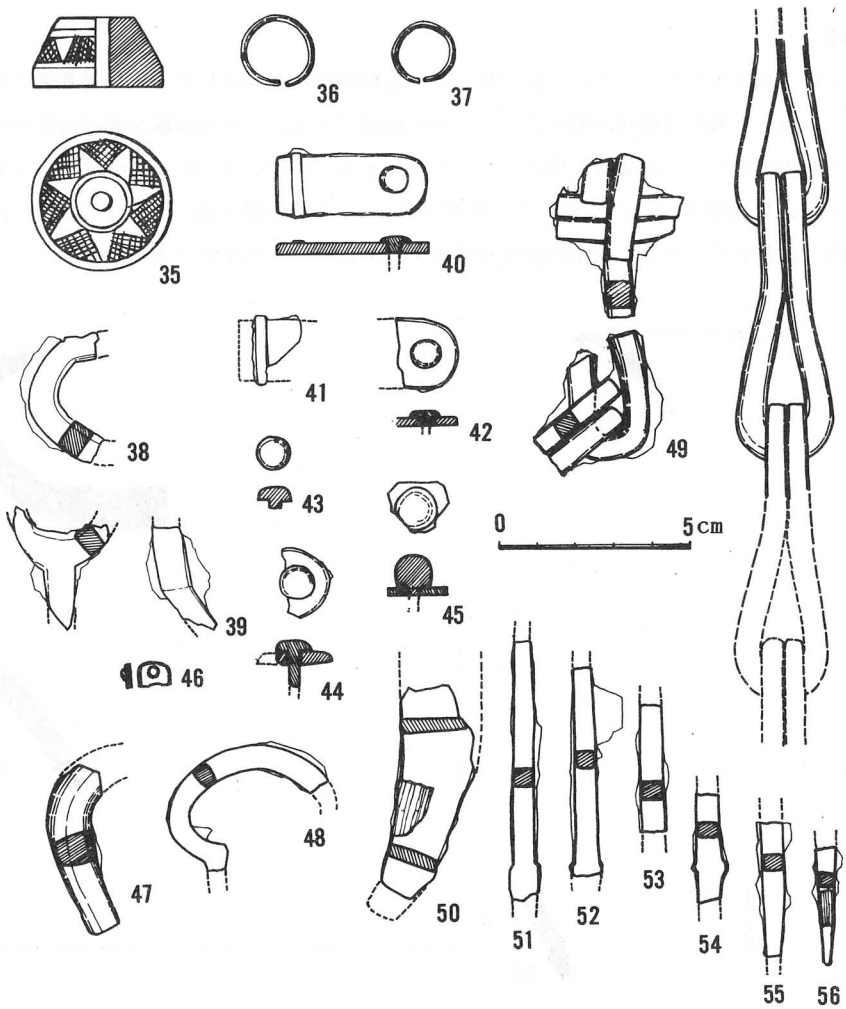
第10図　二子塚古墳出土須恵器実測図

3. 玉

これも玄室内の礫層内に割れて散らばった状態で出土した。すべて細片となっており、色調は茶褐色をしている。細片の中に比較的大きいものもあり、棗玉ではないかと考えられる。玉の出土はこれだけでで、床面を精査したが他のものは認められなかった。

4. 紡錘車

玄室東腰石下の敷石との間から出土したものである。これも玄室が撹乱を受けているため、副葬時の位置を示すものではない。青灰色の滑石製で、上面径2.0cm・底面径4.6cm・器高1.8cm・孔径0.5cmである。器胴面には、使用痕が残る。表面の斜面に、鋸歯文と、その上下に一条の線刻をする。底面は内孔縁に近く二条と外縁に寄せて一条の線刻を施し、鋸歯文を繞らす。鋸歯文内は斜行線刻である。孔内に芯は遺存していなかった。



第11図　二子塚古墳出土紡錘車・金環・馬具・銑鏃実測図

5. 馬具

馬具は、轡・留金具・鐙鎖・鉸具などが出土したが、いずれも破片であった。

轡 (38)は、遊環の破片であり、復元径3.8cm・断面は長方形である。これはどの部位のものか推測すれば、銜と連結する引手の遊環であろう。(39)も破片の遊環である。その径は3.2cmで、鉄棒が一方に伸びている。遊環と鉄棒はくの字状に曲がっていることから、引手壺になる部分である。これも断面は長方形を呈している。

留金具 (40)~(45)の出土があるが、完形は(40)だけである。この(40)は、長方形の一方を半月状に丸味をもたせるもので、長さ4.0cm・幅1.6cm・厚さ0.3cmある。そして、長方形板の丸味をもった端から0.5cmの所に、頭部半球状の笠鋲が打ち込まれている。鋲の頭部径0.7cm・頭高0.15cm・鋲身径0.3cmを測る。鋲身は平板を出た所で折れてしまっている。また平板の方形となる側には、長さ1.7cm・幅0.25cmの長方帯の鉄片を付けている。遊環的なものであろうか。(41)は平板の方形側しか残らず、復元幅は3.9cmである。ここにも長さ1.8cm・幅0.3cmの長方帯の鉄片を付けている。(42)は平板の丸味をもった側が残るもので、幅は1.9cmである。やはり笠鋲が打ち込まれており、鋲頭部径0.8cm・頭高0.2cm・鋲身径0.2cmである。これは(40)に比較してやや大きい金具である。(43)は笠鋲のみで、鋲頭部径0.9cm・頭高0.4cm・鋲身径0.3cmである。(44)は円座板に笠鋲を打ち込むものである。円座径1.9cmあり、笠鋲は頭部径0.9cm・頭高0.3cm・鋲身径0.3cmを測る。(45)は大形笠釘で載頭円錐形をしている。頭部径0.9cm・頭高0.9cm・釘部径約0.3cmを測り、飾り金具の釘と考えられる。

鞍金具 (46)は笠鋲と平板片のみの断片であるが、鞍の縁金具であろう。鋲は頭部径0.2cm・頭高0.1cm・鋲身径0.1cmある。平板の厚さは0.1cmである。

鉸具 (47)・(48)二点の出土があるが、いずれも破片である。(47)は現在長4.2cm・断面は長方形を呈す。これは尻繋の鉸具であろう。(48)は断面長方形の鉄棒を曲げ瓢形にしたもので、現在長3.2cm・推定幅は4.5cmあると思われる。

鐙鎖 鐙自体は出土しなかったが、(49)の鎖片が得られた。鎖は断面長方形の鉄棒を曲げ連結させている。兵庫鎖の間幅は長く、一間の長さ7.5cm・遊環部径2.5cmである。

直刀 (50)は直刀の柄部先端の破片であろうと考えられるものである。現在長は5.5cmあり、断面形は長方形をなしている。その破片には木質が付着している。

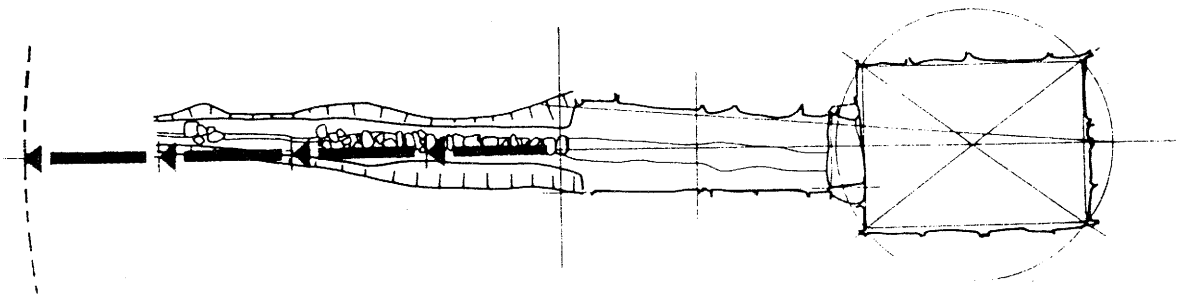
鉄鏃 (51)~(56)は鉄鏃の破片であるが、尖根式鉄鏃とすることができるが、刃部は欠損しているため形状は不明である。(51)は篦被部のみで現在長6.8cm・断面形は0.4×0.5cmの方形である。(52)は現在長5.4cm・断面は方形をなす。(53)は現在長3.2cm・(54)は現在長2.9cmあり、いずれも篦被部の遺存である。(55)・(56)は茎部のみで、それぞれの現在長は3.5cm・3.0cmある。(56)には柄材の木質が付着している。

V 小　　結

志方中央部を一望する台地上に築造された二子塚古墳。それは、より平地部に進出して築かれた古墳といえるであろう。その墳形は円墳であるが、約3mの盛土版築でもって墳丘を築く古墳

時代後期の大形墳である。円墳の径は約22mあり、その雄姿は地域首長の系譜を伝えるものであった。古墳主体部は横穴式石室を有し、全長12.25m・玄室長5.10m・玄室幅1.80m。羨道長7.25m・羨道幅1.36mであった。二子塚古墳の築造時期は、出土須恵器の蓋杯・瑞などから決定された。とくに蓋杯は、Ⅰ・Ⅱ類に分類できる。大阪府教育委員会『陶邑』Ⅲに掲載されている中村　浩氏の「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」に依れば、前者はⅡ－Ⅴ型式と共通するものをもち、Ⅱ類はⅡ－6段階と同一型式であると考えられる。このことを基本に時期を考えれば、Ⅰ類は6世紀後半、Ⅱ類を7世紀初頭に置くことができる。すなわち、二子塚古墳はⅠ類の蓋杯・瑞・壺などが副葬された時点に築造時期が決められる。7世紀初頭の須恵器は蓋杯に限定され、追葬に伴う土器とすることができる。二子塚古墳は石室内が後世に撹乱されたため、家族の墳墓として継続使用した時期は判然としがたい。だが、石室羨道入口が扉石を使用するものであったことから、追葬を行なったことが充分考えられる。その石室を継続した時期を、ただ出土した一点の破片ではあるが高台を付ける杯身をもって、家族の奥津城として継続使用したとするのは大胆なことであろう。それが家族の系譜を引くもので最後に扉石を閉じた者であったとするのも不可能ではないが、ここでは一応6世紀後半から7世紀初頭を使用した期間と考えておきたい。その扉石であるが、加古川市内で用いられた横穴式石室では、池尻古墳群16号墳・地蔵寺古墳があり（山本祐作氏御教示）、いずれも古墳時代後期の大形墳である。これらは地域統轄者と想定できる古墳で、二子塚古墳もその範疇に入ることが充分考えられる。二子塚古墳が志方地域の平坦部を望む台地上に築造されることの意義は大きいものがありそうである。

志方町では二子塚古墳以降の古墳は、宮山群集墳第1号墳を除きほとんどないといってよい。他の古墳時代後期の古墳は、二子塚古墳よりやや先行するが同時期の範囲に入る。それらの古墳の墳丘・石室の規模を比較すると、二子塚古墳の築造時期を頂点に衰退していくのである。まさに一気に開花し散るというような状況である。そのなかでも宮山群集墳は最後まで営まれるのである。志方町の古墳時代後期の古墳は、天神山・宮山・石打山の各群集墳（名称は『古代の志方』に依る）以外は1～2基の墳墓を築くだけである。ここに天神山・宮山・石打山各群集墳を、志方地域を代表する地域同族関係に結ばれた統轄者達の家族墓と考えられるのではなかろうか。そ



第12図　大阪府白峠山古墳平面企画図

の中でも宮山群集墳は、常に自立性をもった墳墓と思われる。

それでは、なぜ志方町において古墳時代後期の古墳が、一気に開花し散るという状況がおきたのであろうか。これは、池尻古墳群をも含めた広い地域としての加古川西岸の動向を把握する必要がある。加古川東岸とくに日岡・西条古墳群の前方後円墳を築造しえた政治力に対し、加古川西岸が古墳時代後期に台頭する要因 ― その背景にある政治的動向は、大河加古川を間に激烈なものがあったのではなかろうか。紙数の関係もあり詳細に記すことはできないが、これは今後の課題であろう。その一端を二子塚古墳にみることができた。さらに追究作業を続けるなかで具体的に、地域の様相を描いていきたいと考えている。

Ⅵ 加古川市内の横穴式石室の企画について

現在まで横穴式石室の構築企画追究には、平面プランが重視されている。しかし、玄室の面積による比較や、石室平面を方眼でもって検討する方法などは、果して横穴式石室を構築企画という問題から石室の歴史的編年に結びつけることが可能であろうか。疑問を感じて久しい。ここで提出しようとする方法は、横穴式石室を一定法則により規格化して単純図形に置き変えることである。そして使用尺を考えることで、地域における古墳が規制されて展開した状況を解明できるのではなかろうか。度量衡について政治性が絡む歴史の流れを考える時、石室構築のために使用尺の究明の意義は大きい。死後の世界でもある石室空間といえども規制された場であり、無移序な構成はとらなかったであろう。

私は先に『古墳構築規矩論ーそのⅠ横穴式石室』（元興寺文化財研究所年報1974）において、石室は左右非対称であり、玄室平面の対角線の中心点から描かれる円半径を基本単位に構築企画されていることを記した。第12図に載せたのは大阪府泉南郡に所在する白峠山古墳の平面企画であり、玄室円半径を羨道部へと展開することで規制正しく構築企画されているのが判明する。この方法を基本に加古川市内の石室に援用し、地域集団の規制された造墓過程を明らかにしたいのである。ただ、この報告書内では紙数の関係もあり、その一端を記すことに止めたいと思う。

まず、加古川市内で著名な古墳時代後期の群集墳といえば、池尻古墳群があげられる。この古墳群の報告書『印南野Ⅰ・Ⅱ』に掲載された実測図をもとに考えてみたい。

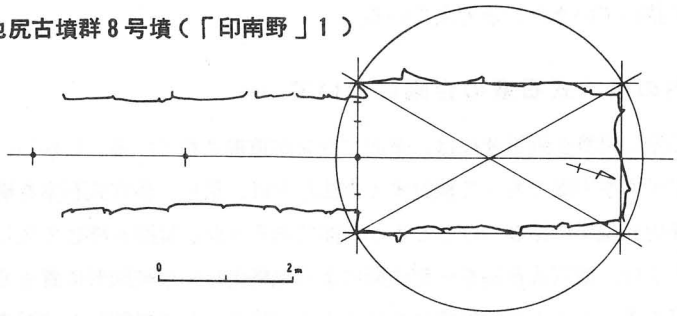
5号墳は、玄室半径を1とすれば羨道部に2展開させたものである。この数値を1：2と表現する。6号墳も1：2となり、さらに8・11号墳も同一の展開を示す。15・16号墳は1：3の展開を示し、群中でも最も大きい規模をもつものである。5号墳から16号墳までの古墳は、出土した須恵器をみるとほゞ同一時期に限定されるようである。何家族かが時期差は若干あるかも知れないが、大局的には同時期とされる。1：2の企画比率をもつものが多いことから、群集墳中では基本的な比率であったのではなかろうか。このことからすると15・16号墳は、その中でも統轄者の墳墓であろう。これは群中でも単数で存在し、この墳墓を頂点に上下関係が石室に表現されていると考えられる。この玄室円半径を一応高麗尺の1尺＝35.6cmで計算すると、15・16号墳は8尺、5・8号墳は7尺、6・11号墳は6尺となる。まさにこの円半径の尺度が、生前の被葬者

の地域での地位と相関関係となって石室が構築されたのである。

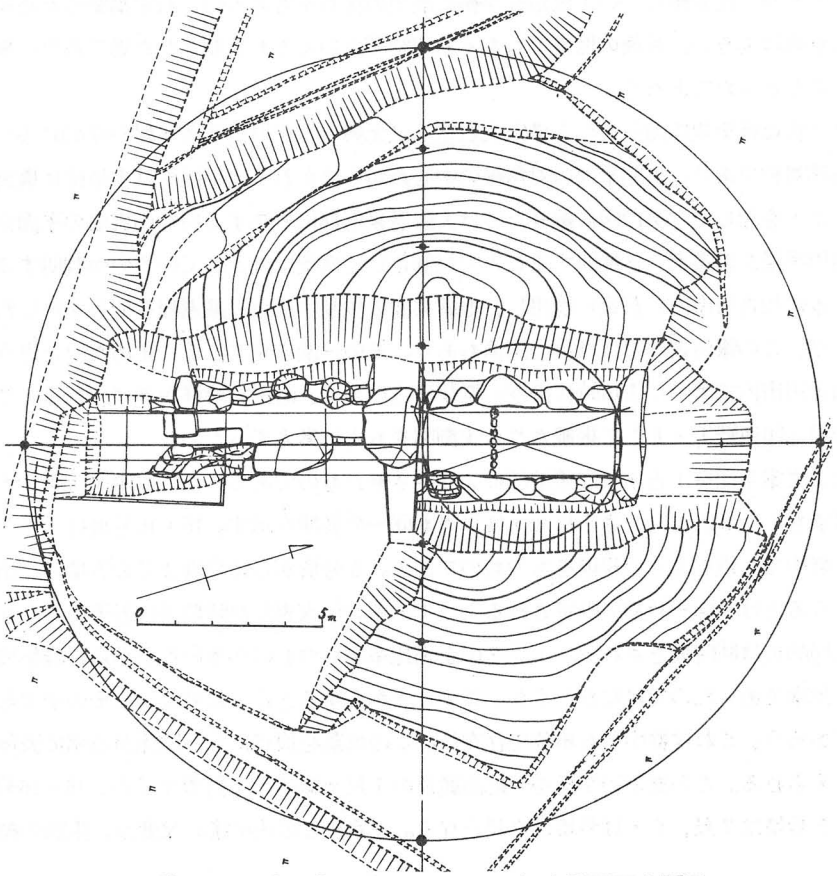
それでは、志方二子塚古墳の場合はどうであろうか。先の玄室円半径を求め羨道部に展開すると、１：３の展開比率が得られる。尺に換算すれば、玄室円半径は８尺となる。池尻古墳群の15・16号墳に匹敵する規模をもっているのが判明する。これは小結にでも触れたように地域の統轄者であり盟主であったことが裏付けられるのである。

他の古墳群でも基本は１：２であり、造墓者の普遍的位置を示している。紙数の関係もあり詳細は別の機会に記すことにして、玄室円半径を展開させる企画方法がもつ有効性の一端を示した。

（1）池尻古墳群８号墳（「印南野」１）



（2）志方町二子塚古墳



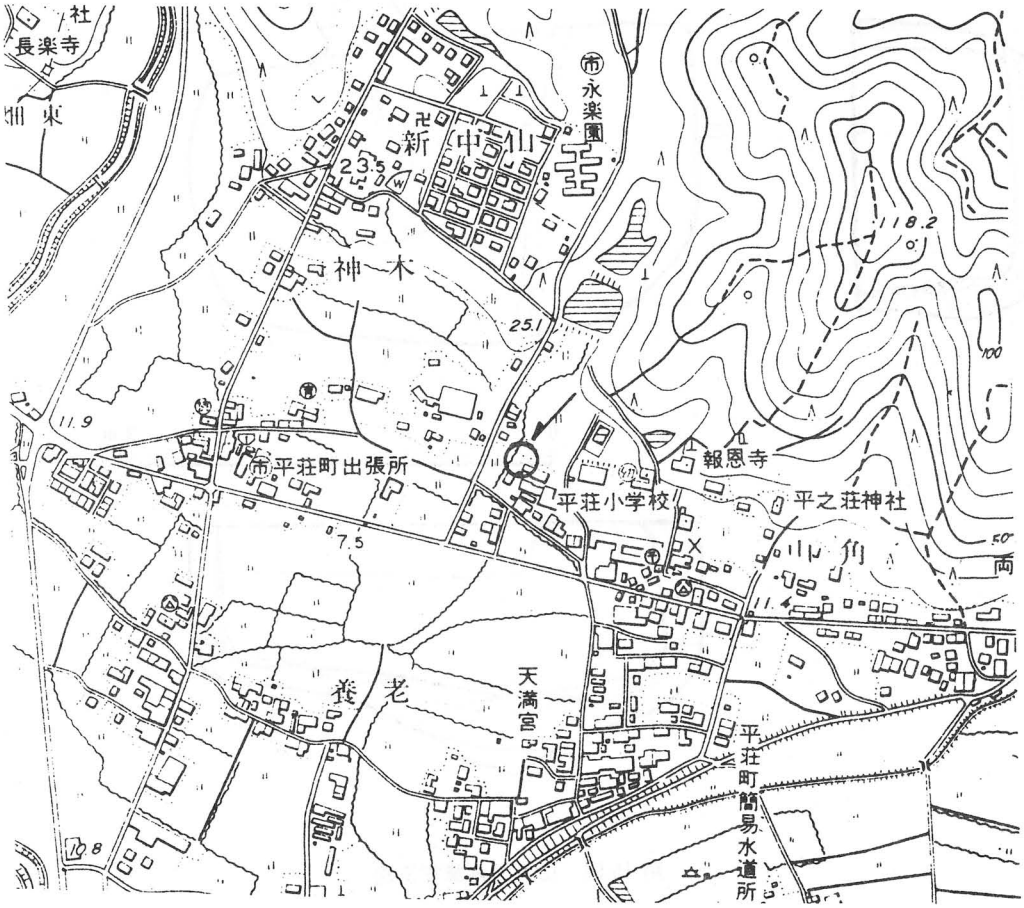
第13図　池尻古墳群８号墳・二子塚古墳平面企画図

3　平荘町山角の貯蔵庫の調査

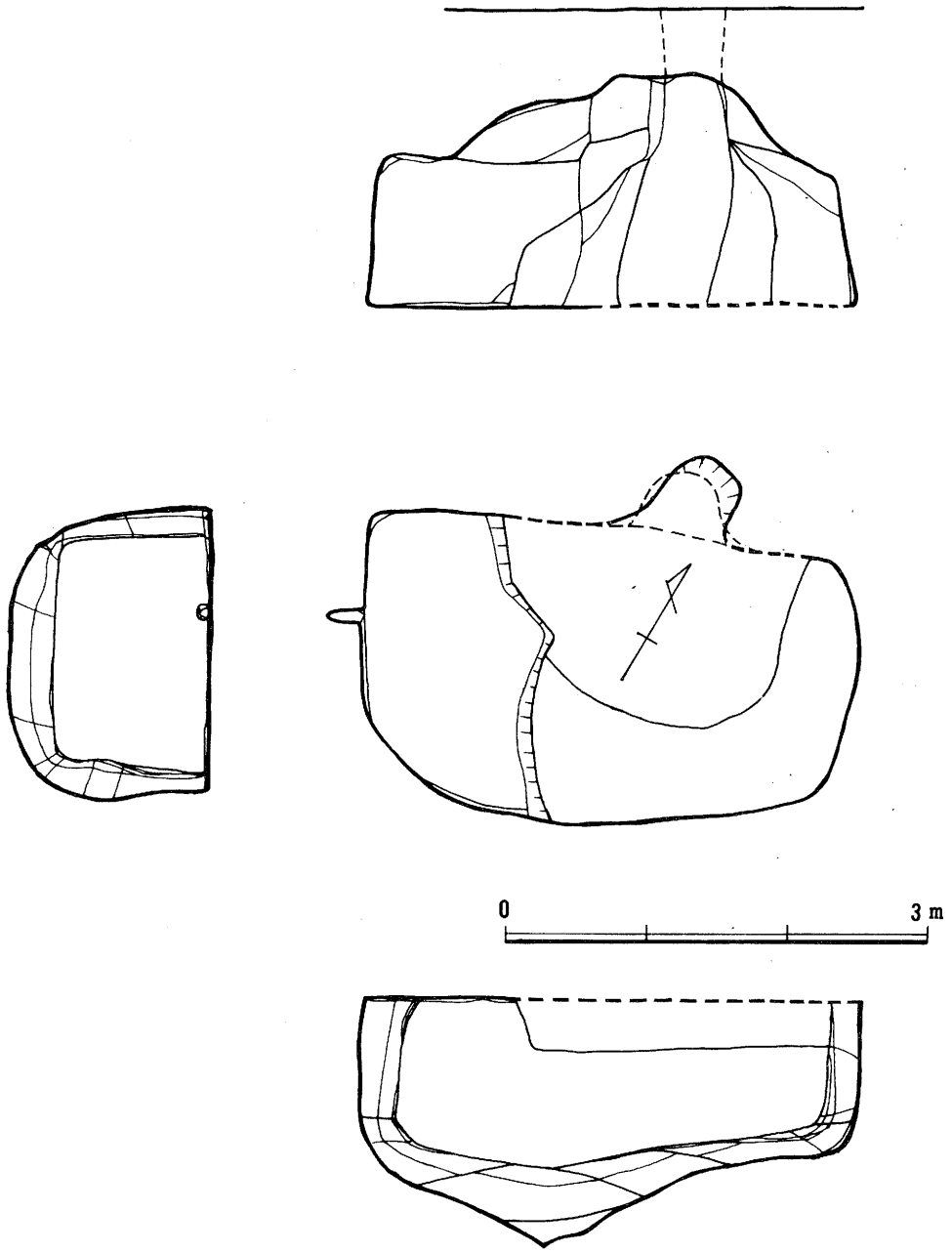
Ⅰ　調査に至る経過

加古川市平荘町山角に所在する貯蔵庫は、全く偶然の機会により発見された。それは、神木氏が新宅建設に併行してコンクリート壁を新設中、この貯蔵庫の天井部が崩壊したためである。加古川市教育委員会では連絡を受け、緊急に発掘調査を実施することになった。

この貯蔵庫は弥生時代のとは異なり、地下式の穴を掘り入口は垂直に室に入るものや階段を付けるものがある。貯蔵庫は関東地方をはじめ東北・信州地方で発見報告されている。そして、複数で地下に設けるものが多く、内部は方形に造る。内部天井はアーチ状を呈している。他の発掘例でもほとんど遺物は出土せず、その掘削した時期は確定していない。二例だけ墓室として使用したのがあるが、現在では貯蔵庫とするのが一般的である。そして、文献を調べていくと屋敷内に含まれるのが判明する。



第 14 図　山角貯蔵庫位置図



第 15 図　山角貯蔵庫実測図

今回の発掘調査において時期を確定する遺物の出土を期待した。さらに内部遺構の把握に務めることにした。

発掘調査は加古川市教育委員会が主体となり、昭和57年3月24日～29日まで実施した。この間調査にあたっては、土地所有者神木義二氏をはじめ現地作業では大北正勝・石原浩一・柴田博己の諸氏の助力を受けた。ともに記して厚く感謝の意を表したい。

それでは次に、遺構の状況について記すことにする。

Ⅱ 調査の成果

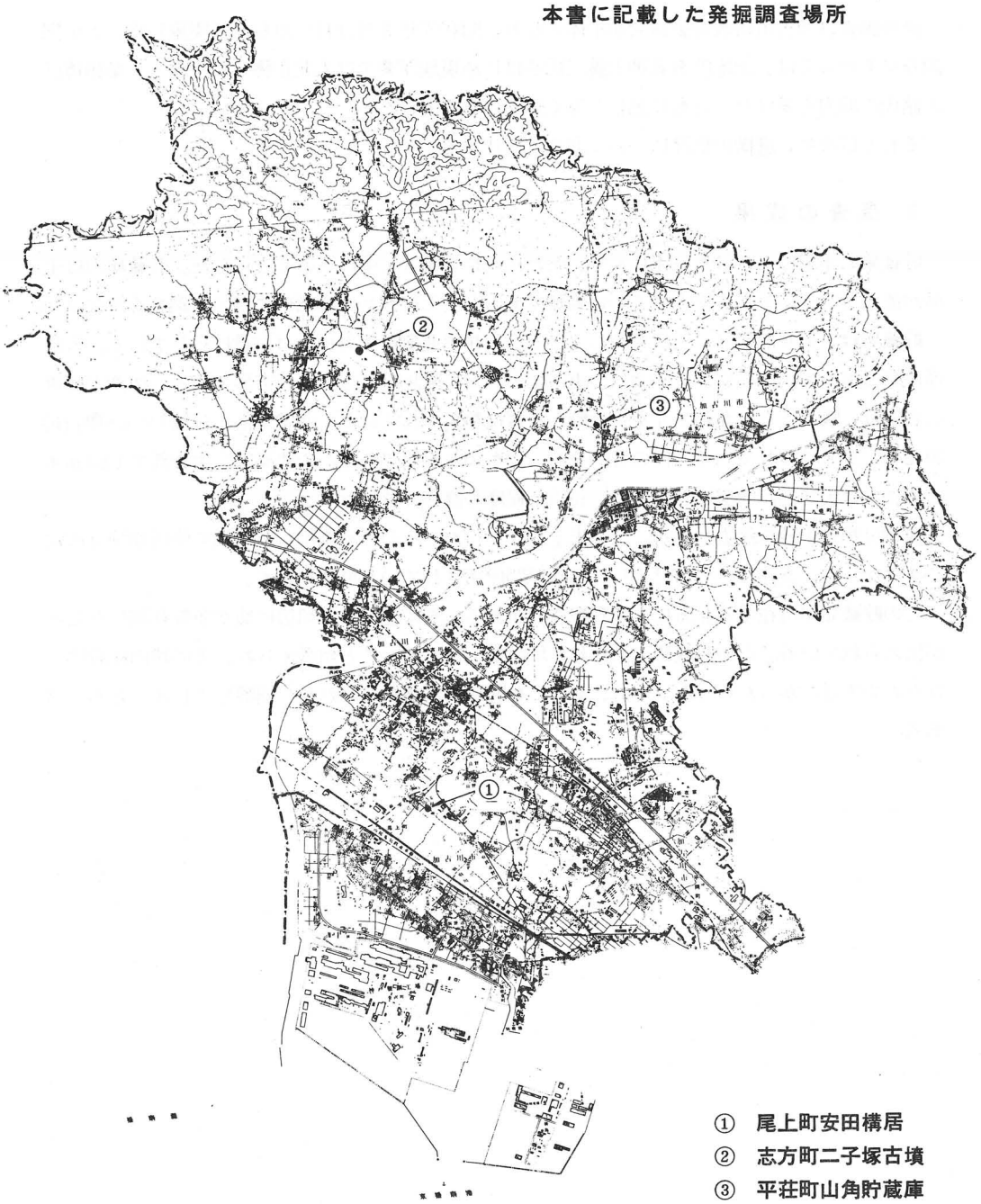
貯蔵庫の本来の入口は水田下にあり、新たに入口を堀って中に入ることにした。貯蔵庫内は土砂が流入し、その全てを除去するのは困難であった。そのため西側部分について調査を行なった。

貯蔵庫は、天井部がアーチ状をなしている。天井部北側に上方に入口が設けられている。入口径は46cmあって円形に穿つ。平面は、東西幅3.70m×南北幅2.16mの長方形である。南西と南東の各隅は、隅丸となり北西・北東に比較して雑な整形をしている。西壁下部には幅12cm・奥行約30cmの穴があけられている。何の目的をもったものか不明である。天井高は、中央部で1.83mある。これは天井部が崩壊したためで、1.60m程度の高さであったろう。

遺物は相当土砂を除去したが、全く出土しなかった。そのため掘削した時期や使用期間は決定できなかった。天井はススが付着し、ある期間使用されていた痕跡を残す。

この貯蔵庫が所在する北方に、名刹報恩寺がある。その盛時には周辺に坊が多数存在したことが伝えられている。この貯蔵庫のあたりも坊の堂宇があったことが考えられ、その坊内に設けられたものではなかったろうか。なお、南方にも貯蔵穴が認められたが、崩壊してしまったそうである。

本書に記載した発掘調査場所

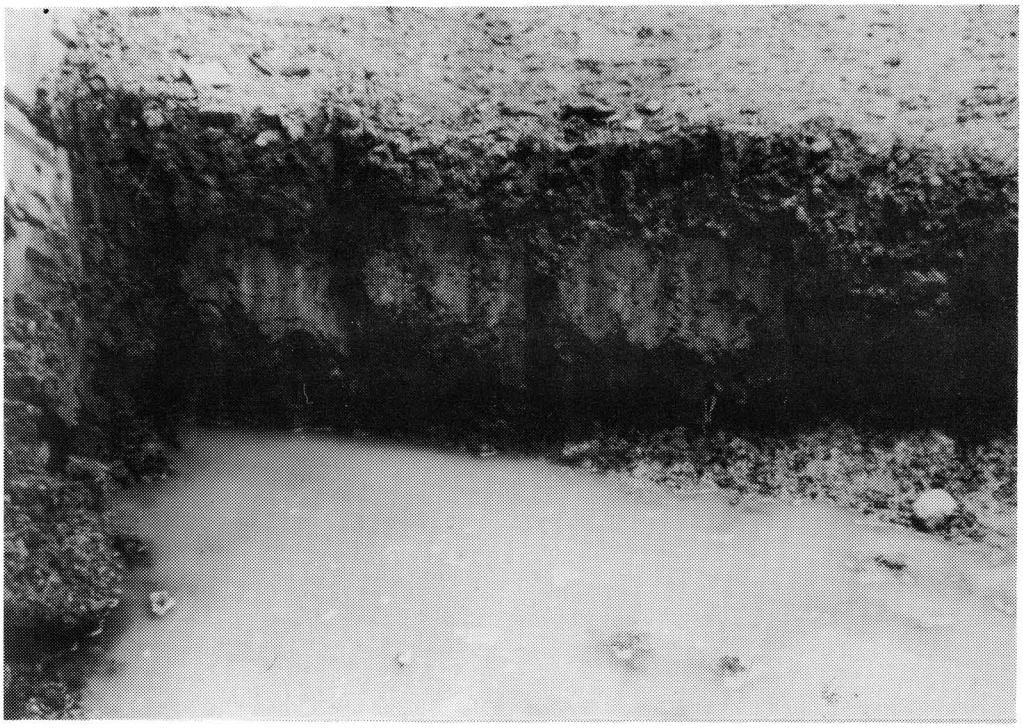


① 尾上町安田構居
② 志方町二子塚古墳
③ 平荘町山角貯蔵庫

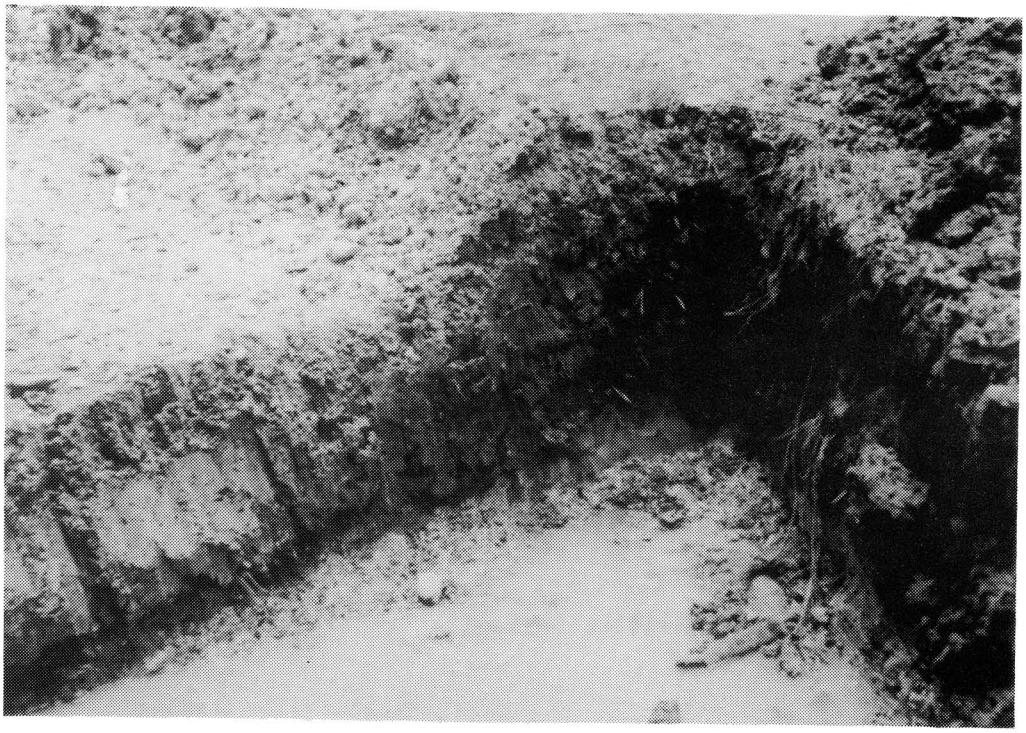
加古川市埋蔵文化財調査集報Ⅰ
昭和58年3月発行

編集
発行　加古川市教育委員会文化課

印刷　高　橋　タ　イ　プ



堀跡・調査状況（北東より）



同　　上

図版二　志方町二子塚古墳

発堀調査前状況（北より）

遺物出土状態

図版三　志方町二子塚古墳

墳丘南北断面

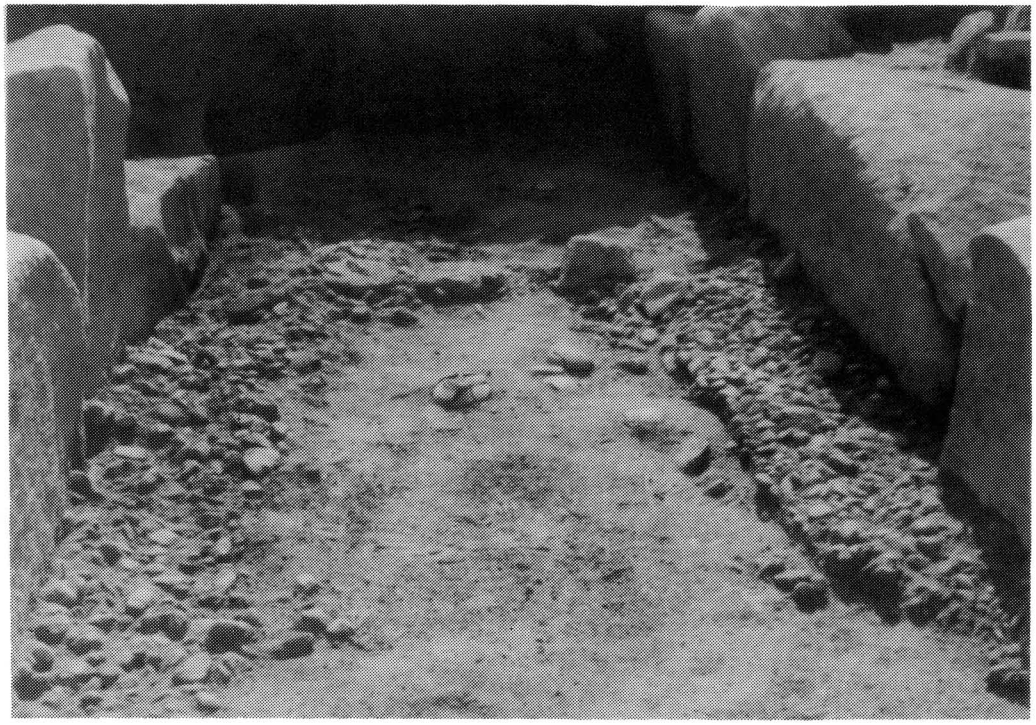
同　東断面

石室全景（北より）

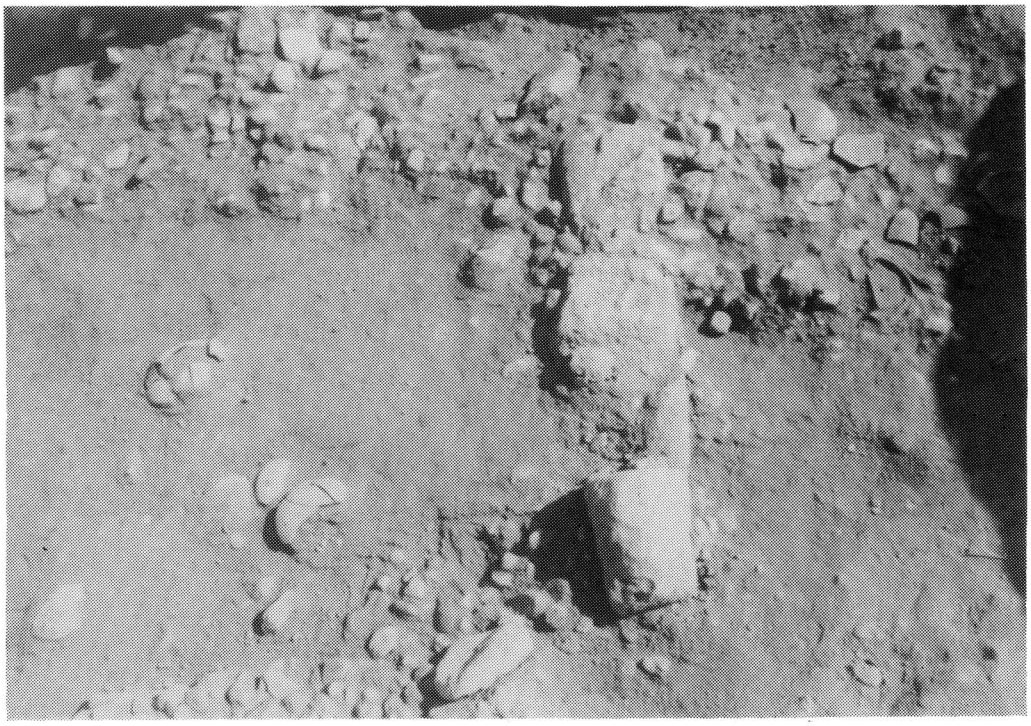
玄室全景（北より）

玄室全景（車より）

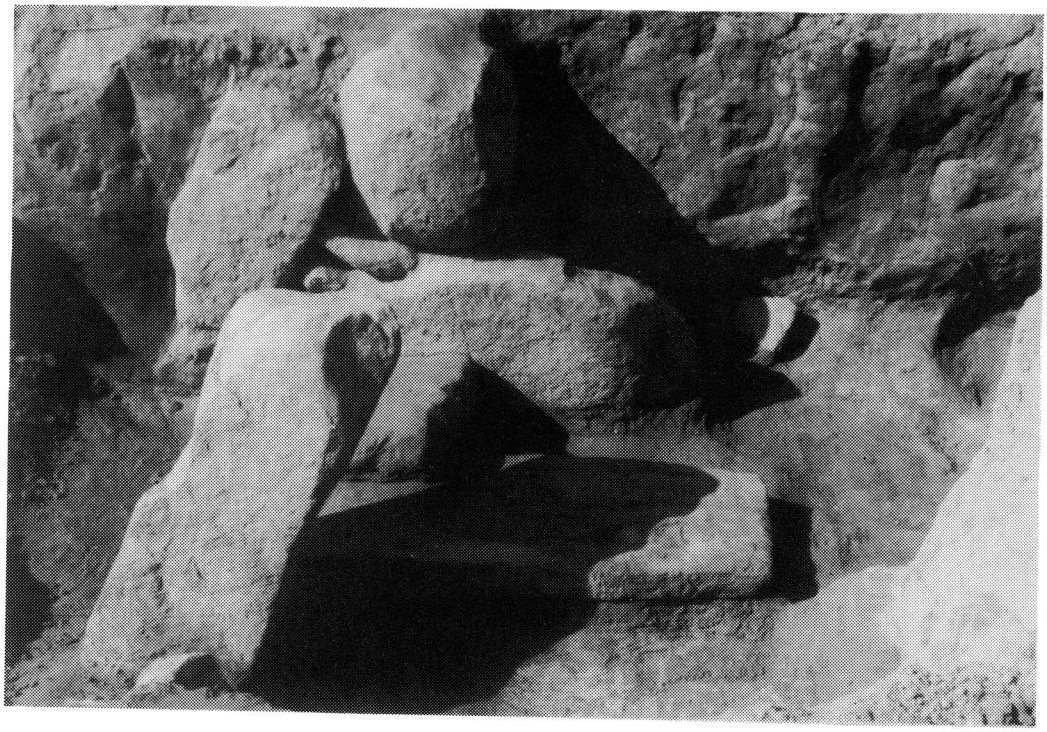
同上（西より）



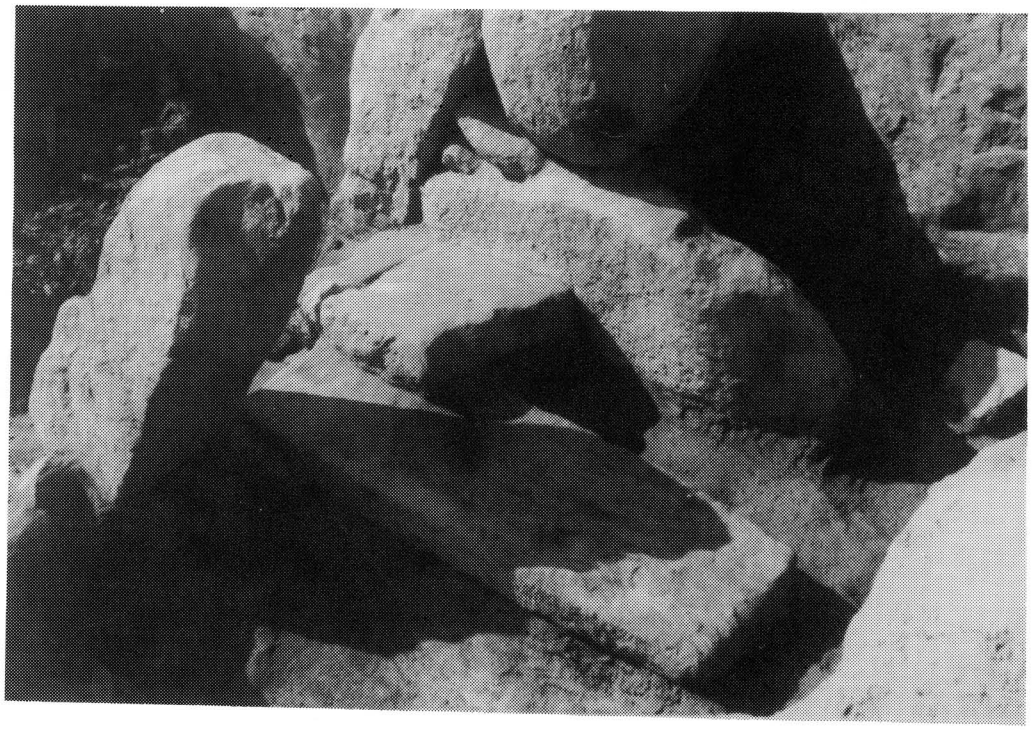
玄室床面状態（北より）



閼 石・遺物出土状態



羨道側壁及び扉石（南東より）



同　上（北東より）

羨道入口及び扉石（南より）

扉石近接

南西隅

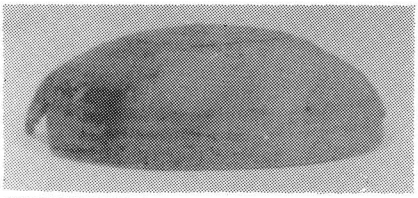
北西隅

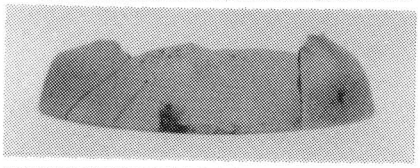
図版一〇　平荘町山角貯蔵庫

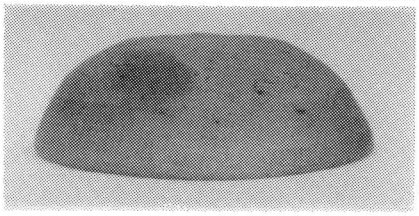
東壁

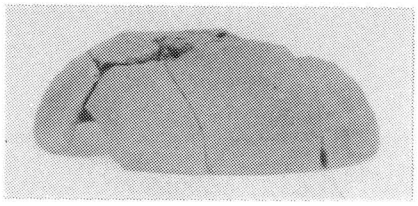
貯蔵庫入口

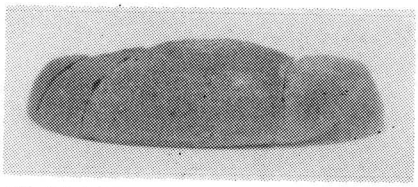
図版一一　志方町二子古塚古墳　須恵器

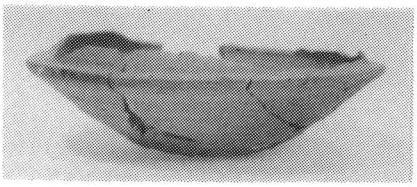

2

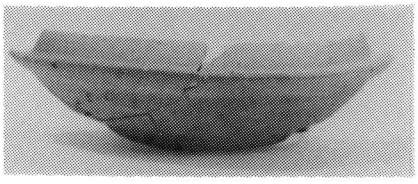

4

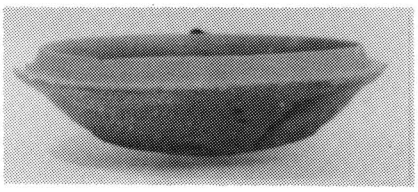

5

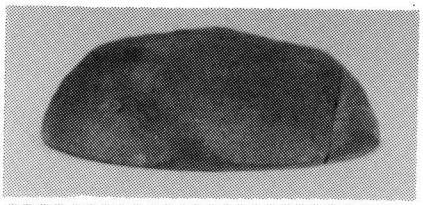

6

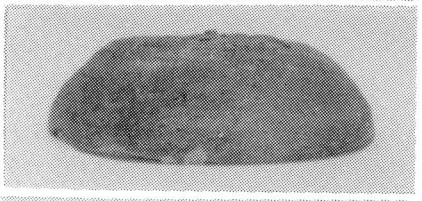

7

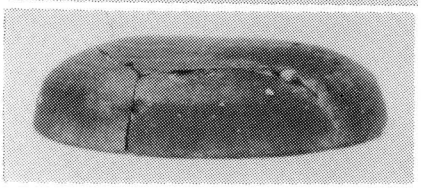

15

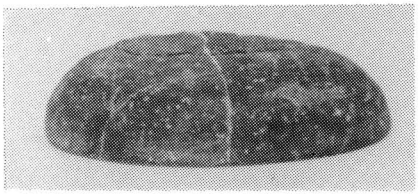

16

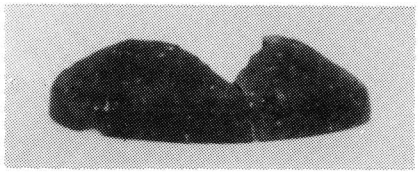

17

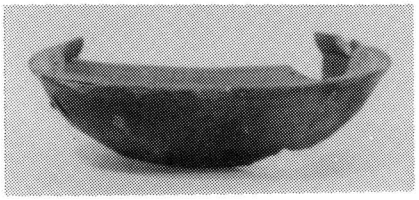

8

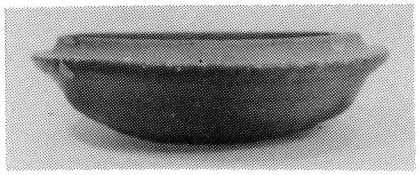

9

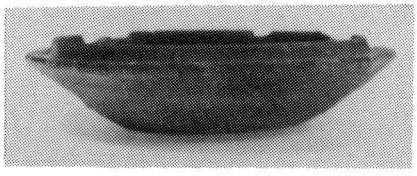

10


11


12


21


22


23

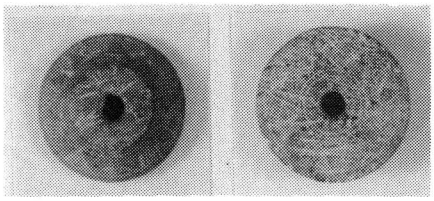
（番号は実測図と共通）

図版一二　志方町二子塚古墳　須恵器・鉄器

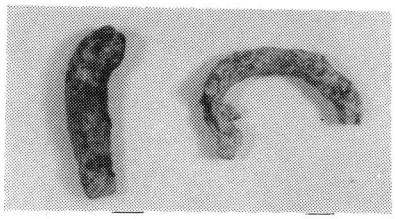
26

29

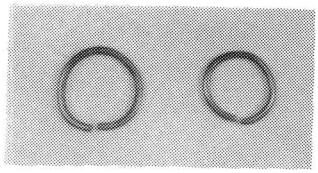
30



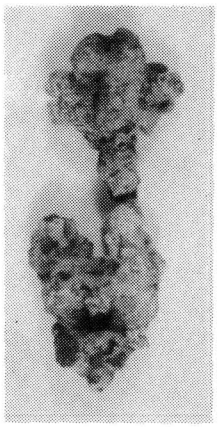
35



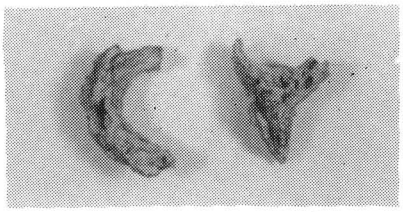
47　48



36　37

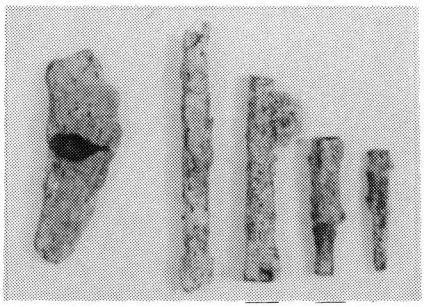


49

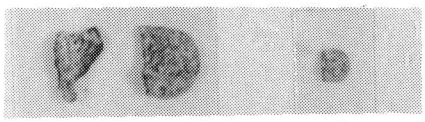


38　39

40　43　45　44



50　51　52　55　56



41　42　46

（番号は実測図と共通）